

近世天皇家の追善仏事と泉涌寺・般舟院

佐藤一希

はじめに

本稿は、近世天皇家の追善仏事の執行体制をめぐり、仏事を主導した泉涌寺と般舟院を始めとする御黒戸寺院（般舟院・二尊院・廬山寺・遣迎院）が有した機能、さらに天皇家との関係にみる両寺の地位の変遷に関して、基礎的考察を行うものである。

近世天皇家の祖先祭祀という観点では、これまで葬送儀礼の問題を中心に研究が進められてきた。まずは、本稿が主題とする追善仏事の問題と密接に関わる中世後期から近世前期にかけての天皇葬送儀礼の挙行体制とその変遷を概観しておく。^① 応安三年（一三七四）、後光厳上皇の葬送儀礼が泉涌寺伽藍を儀礼空間として執

り行われた。この事例では、泉涌寺法堂における龕前堂儀礼、同十六観堂院の中庭における山頭儀礼（火葬儀）・拾骨を経て、般舟院が管理する後深草上皇の葬堂である深草法華堂への納骨がなされ、この三部構成が以後の天皇葬送儀礼の基本を形成する。その後、応仁二年（一四六八）に泉涌寺伽藍が全焼したことを受け、明応九年（一五〇〇）の後土御門天皇の葬送儀礼からは、龕前堂・山頭儀礼の挙行場は仮設建築で代用されるようになる。また、十七世紀以降には、承応三年（一六五四）の後光明天皇の葬送儀礼の際に火葬に代わり土葬が採用されたことで、深草法華堂への納骨儀礼は廃止され、泉涌寺廟所における土葬儀礼へと変化する。泉涌寺伽藍を使用しない仮設建築を用いた形式はそれ以後も継続し、幕末期に至るまで泉涌寺における天皇葬送儀礼の基本形式として

定着することになる。

近世天皇葬送儀礼の特質としては、承応期の火葬から土葬への葬法の転換がこれまでクローズアップされてきた。この歴史的意義について、野村玄氏は近世前期の江戸幕府による皇位管理を前提においた対朝廷政策の一環として政治史的位置づけを行った^②。

また、久水俊和氏は土葬への移行に伴う分骨の否定は、天皇の遗体処理が泉涌寺に一元化されたことを意味するとして、それまで天皇の納骨場であった深草法華堂を管轄する般舟院との差別化が図られた点に画期性を見いだしている^③。

だが、これらの先行研究では、土葬が結果的にその後も継続したことから、検討の下限が承応期に留まる点に問題を残していた。これを受け、筆者は承応期以降の時期を視野に入れて、近世天皇葬送儀礼の変遷を天皇の葬法・被葬寺院・中陰法要の執行寺院などの観点から再検討した。その結果、葬法・被葬寺院は承応期に確定事項とされていたわけではなく、その後に死去した天皇の遺言確認、それを受けた朝廷上層部の議論、所司代の意向表明などを受けて、延宝・貞享期に徐々に確定していったこと、さらに、延宝期の東福門院・後水尾法皇の相次ぐ死に際して、泉涌寺は着座公卿の派遣が伴う公的な形で中陰法要を自院にて執行すること求め、一時的に朝廷に認可されたこと、最終的に宝永期の東山天皇の中陰法要に際して、泉涌寺に般舟院と同等の格式での中陰

法要の執行が認められることとなり、以後幕末に至るまで、宝永期を先例とする体制が定着したこと、が明らかになった^④。

また、近世における泉涌寺と般舟院の地位に関しては、女院・皇子女の葬制に着目することで、寛政期以降、従来般舟院に葬送されていた嫡出皇子女の子の被葬寺院が泉涌寺とその別院雲龍院へと変化し、十八世紀末以降、天皇家との関係をめぐり、般舟院の地位が相対的に低下したことを指摘した^⑤。このように葬送儀礼の側面では、十七世紀以降、時代が下るにつれて、泉涌寺が般舟院の有した機能を自院にも認めさせる形で、天皇家との関係における優位性を獲得していく様相が看取される。

一方、近世天皇家の仏事に関しては、山口和夫氏が近世天皇の祭祀を体系的に整理する中で天皇の仏教信仰や仏事のあり方に言及しており重要である^⑥。だが、専論としての研究蓄積は乏しく、これまでは葬送儀礼が検討の主題とされることが多かったこともあり、追善仏事の問題は中陰法要に関する僅かな言及に留まつていた。また、天皇・女院の死後に恒常的に執行される年忌法要などの問題もほぼ捨象されている状況にある。このように、近世天皇家の追善仏事という枠組みでは、天皇家と寺院との関係性、ないしは各寺院の機能・地位に関する問題は十分に検討されておらず、課題として残されているといえよう。

また、先に述べた諸研究では、葬送儀礼が問題の中心とされた

ことで、分析自体が朝廷・幕府、あるいは泉涌寺側の視点に片寄っている点も問題である。行論中で述べてゆくように、近世天皇家の追善仏事では般舟院を始めとした御黒戸寺院が大きな役割を果たしており、般舟院側の視点を踏まえた検討が求められている。般舟院については、十六世紀末～十七世紀初頭に伏見から洛中西陣の地へ移転したことが知られているほか、文明十一年（一四七九）の創建と中世における組織に関する言及がなされている^⑧。また、伏見に伽藍を有していた十五～十六世紀段階には、天皇の葬礼・仏事の主導権をめぐる泉涌寺との間に度々争論が起きていたことも指摘されている^⑨。だが、十七世紀以降の般舟院の動向に関する研究はほぼ皆無といつてよい^⑩。

以上のような研究状況は、天皇家の祖先祭祀をめぐる近世と近代との接続という点にも問題を残す。武田秀章氏は、幕末維新期の皇霊祭祀の形成過程を詳細に明らかにし、そこでは新たに創出されてゆく神式の祭祀体系の解明に重点が置かれるとともに、寺院勢力の後退などの仏教的要素の排除の側面が強調されてきた^⑪。だが、そこでは近世における天皇家祖先祭祀の執行体制をめぐる、従来寺院・仏教が担ってきた機能のいかなる部分が排除・再編されたのか、具体的な言及を欠いている。また、上田長生氏は文久期以降に本格化する皇霊・陵墓祭祀の形成過程を展望するにあたり、近世天皇家の寺院における祖先祭祀のあり方に注目する必要

性を提起しているが、近世を通じた天皇家と寺院との関係や泉涌寺・般舟院の動向は、幕末期の前提として付言するに留まっている^⑫。

近世における寺院・仏教を核とする天皇家祖先祭祀のあり方が本格的に検討されてこなかった背景には、維新期における皇室の神仏分離の論じられ方にも一つの原因があるように思われる。明治初年の皇室の神仏分離は、①京都御所御黒戸の泉涌寺遷座、②宮門跡・比丘尼門跡の還俗、門号の廃止、③僧位僧官の停止、④追善仏事における仏式の排除、⑤宮中の密教儀礼（大元帥法、後七日御修法）の廃止、に大別される^⑬。こうした動向は、明治四年（一八六八）の神仏判然令を端緒とする神仏分離、廃仏毀釈の動向に連なるものとして位置づけられてきた。だが、近年では戦後の仏教法難史観を克復し、それに伴い神仏分離を廃仏毀釈と必ずしも同義とは認めない見方が提起・定着しつつある^⑭。それを受けて、近代の皇室と仏教との関係に関する再検討もなされ始めており、明治期以降の泉涌寺と皇室・皇族との関係や、明治初年に京都に建設され、仏式と神式の混合した祭祀体系がとられた恭明宮の存在、泉涌寺への念持仏・位牌集約の実態など、仏教・寺院を含み込んだ枠組みで、明治前期に天皇家祖先祭祀のあり方が再構築されていく様相が検討されている^⑮。さらには、近代以降に存続続けた天皇・皇族の私的な仏教信仰の側面についても研究が進めら

れつつある。⁽¹⁶⁾

このような近代史研究における最新の成果を念頭に置くと、幕末期から明治初年にかけて新たな祭祀体系が形成されてゆく中で、従来の仏教・寺院を核とした近世的なあり方は、必ずしも排除の論理のみで位置づけられるべきではないように思われる。本稿では、幕末維新期まで検討の射程を広げることが叶わないものの、近世から近代にかけての天皇家祖先祭祀の展開を仏教・寺院の存在を含めて再考していくためには、その前提として、近世一般の天皇家祖先祭祀の体系を、これまで論じられてきた葬送儀礼の問題に加えて、追善仏事の側面からも提示しておく必要がある。

以上の問題意識のもと、本稿では、泉涌寺・般舟院における近世天皇家の追善仏事の展開を検討する。天皇・女院それぞれの追善仏事の執行体制を明らかにするとともに、両寺院の果たした機能を解明し、さらに天皇家との関係の上で、両寺院が近世の各時期にどのような地位を有し、それが如何なる変遷を辿ったのか考察を加えたい。

第一章 近世天皇家追善仏事の執行体制

第一節 中近世移行期の泉涌寺と御黒戸寺院

近世に天皇家の追善仏事を担った寺院は、①泉涌寺、②御黒戸

寺院（般舟院・二尊院・廬山寺・遣迎院）の二系統に分類される。京都東山に位置する泉涌寺は開祖俊苳が伝えた北京律を基本とする律宗寺院で、近世には四宗兼学（禪・律・天台・真言）の道場とされていた。⁽¹⁷⁾一方、般舟院は文明年間に後土御門天皇の勅願によって三鈷寺・二尊院の兼帯住持であった善空恵篤を招請して開山・創建された寺院で、その維持・経営は、創建以後、浄土宗西山派系の「門中」寺院（二尊院・遣迎院・三鈷寺など）の寺僧によつてなされていた。⁽¹⁸⁾当該期の浄土宗西山派は、後土御門の熱い尊崇を受けたことで数々の寺院が再興されていたほか、天皇・女官への圓頓戒授戒など、宮中の浄土信仰も広がりを見せていたという。⁽¹⁹⁾また、般舟院は少なくとも十七世紀中葉以降は、四宗兼学（浄土・律・天台・真言）の道場として広く認知されており、二尊院・廬山寺・遣迎院と共に「四箇院」と称したまとまりを形成して、天皇・女院らの追善仏事へ勤仕することが確認できるようになる。

中近世移行期の公家と菩提寺との関係性をめぐる理解としては、十六世紀以降の公家社会において夫妻同墓化・寺壇関係の固定が進んだことで、寺院の祭祀空間としての性格が強化したと評価されている。⁽²¹⁾さらに、檀家との関係で菩提寺に格式性が付与され、寺院が被葬者の地位を指標する要素として機能するようになるとの指摘もある。⁽²²⁾天皇家の枠組みで葬礼・仏事を担う寺院が泉涌寺と御黒戸寺院に固定化されていた背景としては、京都を中心と

する公家社会の状況との関連が想定されよう。

このような時代状況の中で、十六世紀以来、泉涌寺と般舟院は天皇家の葬礼・仏事をめぐって対立の様相をみせる。弘治三年（一五五七）に死去した後奈良天皇の中陰法要は、三好政権の裁許により例外的に泉涌寺が差配したものの、その次の正親町天皇の中陰法要以後、十七世紀初頭にかけての天皇・女院の中陰法要はいずれも般舟院において執り行われた。²³⁾ それでは、十七世紀中葉以降、天皇家の追善仏事は両寺院の間でどのように分掌されるようになっていったのだろうか。以下では、中陰法要・年忌法要・回忌法要（区分については第三節で後述）に分けて、その執行体制について検討していく。

第二節 中陰法要の執行体制

まず、【表1】には、正親町天皇以降の近世天皇・女院が死去した際の中陰法要の執行体制の変遷を示した。²⁴⁾ ここからは、十七世紀中葉〜十八世紀初頭にかけて、天皇・女院の中陰法要が開催された寺院と着座公卿の有無、さらにその派遣回数に相違が生じていたことがわかる。近世天皇家の追善仏事では、朝廷から法要執行の具体的な指示が各寺院になされ、着座公卿・散華殿上人が派遣される法要が公的な形式とされていた。

【表1】からは、十六世紀末の正親町天皇から十七世紀初頭の中

和門院までは、般舟院が中陰法要を専管し、泉涌寺では法要自体が開催されなかったことが再確認される。その後、承応期の後光明天皇死去時には、泉涌寺において中陰法要が行われていたようだが、朝廷から着座公卿らが派遣された形跡は確認できない。あくまで泉涌寺僧が内々に法要を執り行ったものと考えられる。

一方、延宝六年（一六七八）の東福門院の中陰法要では、泉涌寺から着座公卿の派遣が朝廷へ願い出され、結果的に七日間の法要の内、初七日・中七日・結七日の三日間のみ着座公卿が派遣されて法要が執行されている。²⁵⁾ また、その二年後の延宝八年（一六八〇）の後水尾法皇の中陰法要では、般舟院同様に泉涌寺における七日間全ての法要で公卿着座がなされた。次章で後述するように、後水尾法皇・東福門院は泉涌寺の再建と霊明殿における位牌祭祀の形成に深く関わっていたと考えられており、こうした帰依の深さも影響し、泉涌寺における中陰法要が朝廷より公的に認可されたものと思われる。

しかしながら、続く後西上皇・明正上皇の中陰法要では、泉涌寺への着座公卿の派遣は三日間に留まっており、般舟院と同格の対応は後水尾法皇の追善仏事に限定されたかに思われた。だが、宝永期の東山上皇の中陰法要では、泉涌寺の再度の願い出を受けた結果、両寺院において着座公卿の派遣を同格にすることが定められ、以後、幕末に至るまで同様の形式が踏襲されることになる。

それでは、中陰法要の執行をめぐる当該期の泉涌寺の動向に対する般舟院側の認識はどのようなものであったのだろうか。その点で、次に示す『般舟院類焼并再建願之記』の端書は興味深い史料である。

【史料1】²⁶⁾

後光明院御中陰之砌マテハ、御着座等ノ御法事、当院（般舟院）斗リニテ御修行之処、東福門院御中陰ノ節、稲葉美濃守（正則、老中）御取持ニテ、泉涌寺江茂御着座ノ御法事被為仰付候由也、但シ御被物ハ無之趣、美濃守殿ノ手翰有之、但本紙也、

稲葉美濃守殿、右門院様（東福門院）御不例御見舞之上使也、

『般舟院類焼并再建願之記』は、享保十五年（一七三〇）に般舟院が火災により焼失した時に作成された史料である。【史料1】は、その端書部分を引用したもののだが、ここからは、「御着座等ノ御法事」、すなわち公卿着座の伴う公的な形での法要は、後光明天皇の中陰法要までは般舟院が専管していたものの、東福門院の死去時に將軍上使として上洛していた老中稲葉正則の「御取持」によつて、泉涌寺においても同様の形式で中陰法要の執行が仰せ付けられるようになったと般舟院側が認識していたことがわかる。

女院の死去時に老中が諸儀礼の対応にあたつたのは東福門院の事例のみで異例のことであつたが、これを契機に、泉涌寺は追善仏事をめぐる自らの立ち位置を向上させるべく働きかけを行つたとみることができよう。²⁷⁾

次いで、両寺院において執行された中陰法要の内容を確認しておく。【表2】には、般舟院・泉涌寺で執行された中陰法要の内容がわかる最も古い事例として、承応三年の後光明天皇の中陰法要（般舟院）と延宝八年の後水尾法皇の中陰法要（泉涌寺）の内容をそれぞれ示した。まず、般舟院における中陰法要では、御黒戸寺の長老と山門・大原衆を導師として、宿忌（逮夜）・当日の法要がそれぞれ執行されている。それに加え、当日の法要では、天台宗山門派あるいは寺門派の高僧が般舟院へ参向して御経供養を執行している。このように、般舟院における中陰法要では、御黒戸寺院に天台系の顕密僧を加える形で法要を執り行う体制が整えられていた。この背景には、般舟院以下の御黒戸寺院と天台宗との関係の深化を想定する必要がある。²⁸⁾

その一方、泉涌寺における中陰法要では、泉山内に複数名存在する長老のいずれかを導師としてそれぞれの法要が執行されている。²⁹⁾ 他寺院の僧侶の関与は見取れず、泉涌寺僧による体制で完結していたということができよう。

第三節 年忌法要の執行体制

続いて、年忌法要の執行体制をみていきたい。近世天皇・女院の年忌法要は、「御年回之聖忌」などと称される通常の「年忌法要」(一周忌、三・七・十三・十七・二十五・三十三・五十・百回忌)と、「毎年御正忌」などと称されるそれ以外の「回忌法要」(四・五・六・八回忌など、年忌の枠組みに該当せず毎年行われる法要)に分類される。以下、煩雑さを避けるために、本稿では、両者を包括した意味合いで用いる場合は、年忌法要とカギ括弧なしで示し、先に述べた区分に基づいて言及する時は、前者を「年忌法要」、後者を「回忌法要」とカギ括弧付で示すこととする。

寺院において開催される天皇家の年忌法要は、中陰法要と同様に宿忌(逮夜)・当日の二日開催が通例である。⁽³⁰⁾【表3・4】には、正親町天皇から仁孝天皇に至る近世の歴代天皇・女院の年忌法要を一覧に示した。なお、これらは天皇・上皇・女院の主催、すなわち朝廷から寺院へ法要執行の依頼がなされ、公卿着座の派遣、あるいは各御所より勅使もしくは代参の使者が寺院へ派遣される形で、明確に天皇家の公的な法要として執行されているものである。⁽³¹⁾例えば、泉涌寺では朝廷から特段に法要開催の意向が伝えられていない場合でも、寺院が独自に法要を行っている事例が確認できる。⁽³²⁾このように、朝廷側の意向や開催主体に関する情報が史料から確認できない場合は一覧に含めていない。以下、天皇と女

院に区分した上で、それぞれの執行体制について検討を進める。

天皇の年忌法要の開催が確認できる寺院は、泉涌寺・般舟院・廬山寺の三寺院である。まず、般舟院の場合は、いずれの事例でも御黒戸寺院の長老が導師として勤仕しているほか、二十五回忌までは、大抵の場合、中陰法要と同様に天台系の高僧による御経供養が平行して開催されている。一方、泉涌寺の場合は、在山している長老衆のいずれかが導師として勤仕している。天皇の年忌法要の執行体制は、中陰法要における対応とはほぼ同様とみることができる。なお、廬山寺では天保期以降に限定される動向ではあるが、光格天皇の年忌法要が修されている。これは、光格の実家である閑院宮家が同寺を菩提寺としていたことに基づく例外的な対応であると考えておきたい。⁽³³⁾

それでは、これらの年忌法要はいかなる開催原則のもと、各寺院において執行されていたのだろうか。まず、「年忌法要」の場合は、基本的に在位中の天皇が主催する形で、それぞれの法要が追善対象となる天皇・女院の忌日に開催されており、加えて、当時存命の上皇・女院主催の法要が「仙洞御沙汰」「女院御沙汰」などと称されて、忌日前後の日程で平行開催されている。⁽³⁴⁾

一方、「回忌法要」の場合は、追善対象と血縁関係(養子も含む)を有した天皇・上皇・女院・内親王らが存命の場合、開催されることが多いが、諸々の事情によって忌日に開催されない事例も散

見される。こうした「回忌法要」の執行は、主催していた人物が死去した場合、それ以後は開催が確認できなくなる傾向がみられることから、かなり私的性格が強い法要といえよう。このように、追善対象となる人物の死去翌年から開催されるようになる年忌法要は、「天皇御沙汰」による開催を原則とする公的な「年忌法要」と、追善対象との関係が前提にある私的な「回忌法要」が並存する構造にあつたと整理できる。

次いで、女院の年忌法要について確認したい。近世の女院は天皇正配として入内し、中宮・皇太后などの后位を得て女院号宣下を受けた存在と、元は後宮に勤仕した女房で、天皇生母となつたことなどを理由に女院号宣下を受けた存在に分類できる。⁽³⁶⁾ まず前者の場合、天皇正配である女院の年忌法要の執行が確認できる寺院は泉涌寺・般舟院のみであり、般舟院では御黒戸寺院の長老が、泉涌寺では同寺長老が導師として勤仕する点で、天皇の年忌法要とはほぼ同様の体制をとっている。天皇の年忌法要と唯一異なるのは、般舟院における法要で、天台系の高僧が参向して、当日の御経供養を行う事例が確認できない点である。その点を除けば、開催原則も「年忌法要」の場合は、在位中の天皇の主催で忌日に開催、かつ上皇・女院の主催で忌日もしくはその前後に法要が平行開催され、「回忌法要」の場合は、追善対象の女院と血縁関係を有した天皇・上皇の存命時に開催されていることから、天皇の年忌

法要とはほぼ同様の形式をとっている。⁽³⁸⁾

これに対して、後者の場合は、被葬寺院によつて年忌法要の開催寺院・原則に相違が確認できる。そもそも、天皇生母となつたことで女院の地位に上つた後宮女房は、墓制・葬制の側面でも、天皇正配として入内した女院とは厳格な区別がなされていた。⁽³⁹⁾ これらの女院の年忌法要が開催された寺院は、泉涌寺・般舟院に加え、廬山寺・清浄華院・雲龍院（泉涌寺別院）・新善光寺（泉涌寺塔頭）が確認でき、いずれも当時在位している天皇が法要を主催している。⁽⁴⁰⁾ 女院と被葬寺院の内訳を具体的に示すと、泉涌寺が後光明天皇生母の壬生院、靈元天皇生母の新広義門院、孝明天皇生母の新待賢門院、雲龍院・新善光寺が仁孝天皇生母の東京極院、廬山寺が中御門天皇生母の新崇賢門院、清浄華院が東山天皇生母の敬法門院、桃園天皇生母の開明門院となる。

こうした後宮女房を出自とする女院の年忌法要は、基本的に各女院の被葬寺院に般舟院を加える形で執行されており、各寺院の長老が導師として勤仕していた。こちらも具体的に示すと、泉涌寺（雲龍院・新善光寺含む）へ葬送された女院（壬生院・新広義門院・東京極院・新待賢門院）は泉涌寺・般舟院で、廬山寺へ葬送された新崇賢門院は廬山寺・般舟院で、清浄華院へ葬送された敬法門院・開明門院は清浄華院・般舟院でそれぞれ法要が執行されているということになる。⁽⁴¹⁾ また、これらの女院の場合は「年忌法

要」の執行が部分的に確認されるのみで、「回忌法要」の執行はほとんど確認することができない。

第四節 武家の寺院警衛と財政出動

最後に近世天皇家の追善仏事における武家の動向について、寺院警衛と財政出動の二点から確認しておきたい。承応期の後光明天皇の葬送儀礼の際には、所司代と上方に所領を有する譜代藩が勤番として京都に出役し、泉涌寺の警衛を担ったことが知られている。⁴⁵ それでは、中陰法要・年忌法要などの追善仏事が開催される場合、上方幕府役人はどのように対応したのだろうか。まずは、承応三年の後光明天皇の中陰法要の警衛に関する史料として、当時丹波福知山藩を治めた松平家伝来の『後光明院御中陰法事』の一節を次に示す。

【史料2】⁴⁴

御中陰之間毎日武家衆出仕之次第、吉良若狭守（義冬、高家）・松平出雲守（勝隆）・伊丹藏人（勝長・板倉市正（重矩）・御目付衆矢部藤九郎・同丹羽平右衛門
右者江戸ヨリ上洛、
板倉周防守（重宗、所司代）・高木伊勢守（守久、禁裏附）・大岡美濃守（忠吉、女院附）・野山丹後守（兼綱、女院附）、大番

衆本多内記（政勝、大和郡山藩主）・同松平伊賀守（忠晴、丹波亀山藩主）・同松平主殿頭（忠房、丹波福知山藩主）、

一、門外両方昼夜御番、

十月十六日ヨリ同廿四日マテ松平伊賀守、十月廿四日ヨリ

十一月三日マテ本多内記、十一月三日ヨリ同月十一日マテ

松平主殿頭、

一、門内昼夜御番、板倉周防守其外雑職・町代毎日相詰者也、

（後略）

【史料2】からは、中陰法要の期間には、江戸から派遣された上使・高家らに加え、所司代・禁裏附・女院附ら在京幕府役人、さらに上方譜代藩主三名が般舟院へ出役し、門内を所司代、門外は勤番三藩が担当し、中陰期間を三分割して般舟院の警衛がなされていたことがわかる。このように、中陰法要の際には葬送儀礼における寺院警衛の体制が、中陰法要の期間にも引き継がれて対応されていた。

それでは、一周忌以下の年忌法要の場合は、どのような対応がとられていたのだろうか。【表3・4】を参照すると、後水尾法皇の一周忌の際には、所司代が江戸より遣わされた高家とともに、各寺院に参詣・焼香している事例が確認できる（表3）¹⁵⁵。また、それ以後の事例を確認すると、一周忌の際に所司代・高家あるい

は將軍上使が參詣する対応は近世を通じてはほぼ定着していることがわかる【表3】 219・249・294・433・588・653。

他方で、一周忌以降の年忌法要の際に、所司代や高家・上使などの武家が寺院へ出役する様子は確認することができず、十八世紀後半頃からは、禁裏附兩名が泉涌寺・般舟院へ出役する記事がみられるようになる。次に示すのは、十八世紀末頃の成立と思われる禁裏附の職務規程をまとめた「禁中附武家百ヶ条」の一節である。

【史料3】⁴⁶⁾

(前略)

一、^(第三十卷)平常般舟院・泉涌寺罷越、直ニ御所江罷出候儀不苦、御

廟へ罷越候得者一旦帰宅之上清メ罷出候事、(中略)^(第四十卷)

一、堂上方諸願出候節ハ、見出し付本紙所司代へ出ス、^(第六十三卷)

一、泉涌寺・般舟院諸願出候節者、右同断之事、(中略)^(第六十三卷)

一、御年忌者於宮中懺法講被行候、当日兩寺御法会有之、^(第六十六卷)

一、^(第六十六卷)先帝御祥忌日者般舟院・泉涌寺ニて御法会有之、此節兩

寺へ壱人相詰申候、長袴着用之事、(但執次一人相越候事、

御年忌御法事之節者、兩寺へ罷越候へとも例年之御祥忌ニ

者般舟院斗ニて、泉涌寺ニて御施餓鬼有之、執次罷越候、

尤最早 御所へも罷出、般舟院より引取候事、)

【史料3】は、「禁中附武家百ヶ条」中の泉涌寺・般舟院に言及されている条文を抽出して引用したものである。第六十七条の規定からは、少なくとも十八世紀末頃には、天皇の年忌法要の際に、禁裏附兩名が般舟院・泉涌寺へそれぞれ詰める体制が規定されていたことが窺える。以上のように、江戸から派遣される上使・高家や所司代が寺院における年忌法要に関与をみせるのは基本的には一周忌までであり、それ以後の武家による年忌法要への関与は禁裏附によるもののみであったといえる。

次いで、天皇家の追善仏事における財政出動について確認する。まず、天皇・女院の葬送儀礼に関しては、元和三年(二六一七)の後陽成上皇、寛永二年(二六二五)の新上東門院の死去時より、幕府から法事料が渡されていた。⁴⁷⁾ また、中陰法要に関しても、少なくとも寛永七年(一六三〇)の中和門院の死去時に、「御葬礼御中陰用途千石、新上東門院御例也、従武家沙汰也、」との記事がみえ、「七百五十石者御葬送入目料泉涌寺へ相渡分也、御中陰三百石也、般舟院へ相渡候由」と般舟院に対しても、中陰法要の法事料が渡されることが定められている。⁴⁸⁾ このことから、葬送儀礼同様に中陰法要に必要な費用も、十七世紀前半段階から幕府により負担されていたことがわかる。

さらに年忌法要についても、遅くとも十七世紀後半頃には、幕府による臨時の法事料が下される事例が史料上確認できるように

なる。⁴⁹ 正徳二年（一七二二）、後水尾天皇三十三回忌に際して、武家伝奏徳大寺公全は幕府より下される年忌法要の法事料の額について所司代松平信庸へ照会しており、この時は宮中で懺法講が開催されたため、それを主催した仙洞御所（靈元上皇）に加えて、泉涌寺・般舟院へそれぞれ百石が下行として渡されることが通達されている。⁵⁰

また、幕府からの臨時下行に加えて、各寺院には法要を主催する御所からも法事料が下賜されている。元禄十一年（一六九八）の明正天皇三回忌の際には、般舟院寺門伝奏の万里小路淳房より、武家伝奏柳原資廉・正親町公通へ般舟院に対して下される法事料の確認がなされた。これに対して、武家伝奏は後光明天皇の頃までは「院中」より五十石、「公家」より二十石が負担されていたものの、貞享四年（一六八七）の後西上皇三回忌法要の際に、讓位直前の靈元天皇が法事料として二十石を禁裏御所から下賜しているとして、それ以後は禁裏・仙洞御所いずれも二十石ずつが両寺院に下賜されているとの旨を返答している。⁵¹

近世の朝廷財政は、禁裏附の管理下で半ば幕府財政と一体化した構造にあるため、幕府による支出と朝廷による支出を厳密に区別することは難しい。だが、【表3・4】に示したいずれの年忌法要の開催時においても、幕府による法要自体への介入や財政の抑制などの動きは管見の限り確認できていない。十七世紀後半頃か

ら、近世朝幕関係の基本的なあり方が協調関係という形で定着していく中で、⁵² 年忌法要などのほぼ毎年のように開催される天皇家の追善仏事は、半ば年中行事に近い扱いを受けていたことが想定され、寺院へ下される法事料などの支出も、恒常的なものとして計上されていたと考えられよう。

第二章 近世における泉涌寺・般舟院の存立と地位の変遷

前章では、寺院において開催された近世天皇家の追善仏事の執行体制について、その基礎的概要を検討した。寺院で開催される天皇・女院の追善仏事は、一部の女院のものを除き泉涌寺・般舟院がほぼ専管したことが明らかになったが、両寺院における開催頻度は時期によつて流動的であり、かつ懺法講・法華八講などの宮中法会が御所内で修される場合もあった。⁵³ 御所外の寺院における法要の執行は、その時期の寺院側の事情とも関わるため、泉涌寺・般舟院の寺院としての存立は、天皇家の追善仏事を執行する前提であるとともに、そうした立場を有する寺院がどのように維持されたのか、という点でも論点を提供する。

本章では、まず天皇・女院の年忌法要を開催する寺院が、近世の各時期において、どのような傾向にあったのかを整理する。その

上で、追善仏事を主導・執行する泉涌寺・般舟院の存立が、統一権力との関係の中でどのように図られたのか、先行研究で既に言及のある泉涌寺に加え、般舟院の動向に注意して検討することで、仏事の執行をめぐる両寺院の対抗関係が、どのように展開するのか考察したい。

第一節 年忌法要執行寺院の変遷

前章で確認したように、近世天皇家の年忌法要を執行した寺院は、泉涌寺・般舟院と一部の女院の被葬寺院に限定されていた。

【表5】は、【表3・4】をもとに、十六世紀末以降、天皇・女院の年忌法要の開催場所の変遷とその割合をまとめたものである。

【表5】からわかる点をみていきたい。まず、現在筆者が確認している近世天皇・女院の年忌法要の総開催数は一〇三八例である。その半数以上（五五二例）が般舟院で開催されており、加えて、全体の四割以上を幕末に至るまで占めていることから、天皇家仏事を恒常的に担う寺院としての地位を、近世を通じて維持したことが窺える。この背景には、天皇・女院の「年忌法要」は被葬寺院（泉涌寺・雲龍院・廬山寺・清浄華院）に加え、必ず般舟院でも執行されていたこと、さらに年忌の枠組みからは外れる毎年の「回忌法要」が、少なくとも天明期頃までは般舟院に専管されている状況にあったこと（後述）があげられる。

また、泉涌寺における年忌法要の開催数の推移を追うと、十七世紀前半までは、全体における割合は極めて少なく、般舟院もしくは宮中にて執行される割合が圧倒的多数であった。だが、十七世紀後半以降は、泉涌寺における割合が一挙に増加して、十九世紀以降には般舟院とほぼ同数となっており、徐々に追善仏事を執行する寺院としての存在感を高めていった様子が窺える。こうした寺院側の動向に対して、禁裏・仙洞御所などで修される宮中法会の割合は、十七世紀中葉を機に減少していく傾向をみせており、十八世紀以降には、わずかに一割に満たない程度となることも注目されよう。

このように、近世天皇家の年忌法要の変遷をめぐっては、寺院における法要の開催数が増加し、御所内における宮中法会の割合が次第に減少することが特徴的である。すなわち、十七世紀から十八世紀にかけて、法要の執行を泉涌寺・般舟院へ委任する傾向が強まり、宮中法会が従来担ってきた役割を吸収する形で、両寺院の主導による追善仏事の執行体制が定着したと整理することができる。それでは、こうした変化が生じた背景として、各時期の般舟院・泉涌寺の動向はどのようなものだったのだろうか。

第二節 十六・十七世紀における般舟院・泉涌寺の復興

十七世紀以降、寺院における年忌法要の執行が次第に定着して

ゆく背景には、泉涌寺・般舟院が天皇家の仏事を執行するにふさわしい儀礼空間として整備されることがその前提として要請される。本節では、応仁の乱以来、京都近郊に位置する寺院の例に漏れず、荒廢の様相をみせていた兩寺院が、中近世移行期にどのような経緯を経て、造営・復興（寺觀・建築の維持・整備）が進められたのか検討する。行論中では、先行研究で比較的言及されてきた泉涌寺の動向に加え、般舟院側の動向に注意したい（各寺院と御所との位置関係については、【参考地図】にそれぞれの大まかな所在地を示したので参照されたい）。

まず、般舟院の復興についてみていく。般舟院は十六世紀末までは洛外伏見に寺地を有していたが、その後洛中に移転したとされる。近世の地誌類などは、この点を豊臣秀吉による伏見城建設とそれに伴う都市改造の影響を受けたものと説明している。これに対して川上貢氏は、文禄四年（一五九五）に般舟院の移転工事が着工し、慶長四年（一五九九）以降に千本今出川へ新造されたことを指摘し、その背景には、伏見城築城による影響というよりも、般舟院がそれまで洛外の不便な地域に位置していたため、当該期の京都の都市改革に乗じて移転が図られたものと推測している⁵⁵。まずはこの移転の背景・経緯を確定させたい。

当該期の般舟院をめぐることは、文禄二年（一五九三）正月の正親町上皇の中陰法要に際して、「御中陰御作善就般舟院炎上、於二尊

院修之⁵⁶」との記録が残されており、般舟院が炎上してしまったため、御黒戸寺院の一つである二尊院で中陰法要が執り行われたことがわかる。当時の公家山科言経も、自身の日記に「御中陰者般舟院破壊也云々、二尊院ニテ有之云々」と記しており、移転の背景には、文禄期頃に般舟院が何らかの原因で炎上していたことがまず指摘できる。

さらに、正親町上皇の中陰法要の開催場所となつた二尊院に伝来する『会所般舟院大体訳書』（寛政期頃成立）には、十六世紀中葉のものと比定される二尊院・廬山寺・三鉢寺・浄金剛院の連署状が写されている。十六世紀の般舟院を考える上で重要な史料である。

【史料4】⁵⁷

一、正親町院御代、右般舟院及荒廢候二付、門中一統依願洛陽地へ被移候、連々申上候、般舟院三昧院之儀、

右願文書曰、

可然寺僧依無之、近年及大破候条、都鄙之外聞無勿躰候、此度被引移洛中候者、公私之結縁可有其便候、然者勤行等嚴密令執行、門中弥成一味之思、可抽天下安全之懇祈候、最前雖有此企、依有妨族、不及其沙汰候、衆僧之遺恨此事二候、仍以連署申入候条、此等之趣具被経 叡慮蒙御裁許候者、門徒

各可喜悅之眉候、此由御披露所仰也、恐々謹言、

(年代不明) 十一月三十日

二尊院良純

廬山寺照鐔

三鈷寺良純

浄金剛院良椿

【史料4】では、二尊院以下、廬山寺・三鈷寺・浄金剛院の四ヶ寺住持の連名で、荒廃している般舟院を「洛陽地」へ移転させることが願ひ出されており、朝廷に宛てて発給された連署状が写されたものと思われる。これらの寺院は、いずれも創建以来、般舟院を管理していた浄土宗西山派と関係の深い寺院(「門中」)であった。⁽³⁸⁾また、こうした願ひ出を行う背景としては、寺僧の減少、寺院の荒廃、御所との距離などが主な理由として列挙されている。発給年次は不明であるが、正親町天皇の即位が弘治三年(一五五七)のことで、差出の一人である二尊院住持良純が、天正六年(一五七八)八月に死去していることから、永禄〜天正期頃の史料と比定される。十六世紀後半頃には、般舟院を管理する「門中」寺院によつて、荒廃した般舟院の洛中への移転が請願される状況にあり、それに決定打を与えたのが、文禄期に発生した火災による伽藍の焼失であつたと考えられる。

その後、般舟院は文禄四年三月に豊臣秀吉によつて上京に寺地

を与えられ、同年五月には本据が行われている⁽³⁹⁾。この間の天皇家の追善仏事は、慶長四年までは伏見般舟院で執行されていることが確認できるが(表3)、慶長五年(一六〇〇)正月の正親町天皇八回忌法要は、「於般舟三昧院ニテ御経供養有之云々、上京寺町辺也云々⁽⁴⁰⁾」と上京の移転先の地で執行されていることが確認できる。実際に般舟院の新造伽藍が完成したのは、翌慶長六年(一六〇一)七月のことであつた。新造なつた般舟院を見物した山科言経は『言経卿記』慶長六年六月十一日条に次のように記している。

【史料5】⁽⁴¹⁾

十一日、丁丑、天晴、西陣般舟三昧院禁中ヨリ御建立了、見物了、来七月廿四日、陽光院殿(誠仁親王)十七回忌ニテ可有御法事トテ、此頃新造由云々、近々ニ立柱也云々、

【史料5】によると、般舟院は同年七月の誠仁親王十七回忌の法要に間に合わせる形で、西陣の地に新造されたという。また、前章で引用した『般舟院類焼并再建願之記』には、「征夷大將軍家康公被為感 叡願之深、改伏見之舊地被移洛陽今之地、慶長六年七月御造営畢⁽⁴²⁾」とあり、徳川家康の恩恵により造営が実現したことが由緒として後世に伝えられている様子が窺える。

以上をまとめると、十六世紀中葉段階で荒廃の様相をみせてい

た伏見般舟院は、「門中」寺院によつて洛中への移転が請願される状況にあった。その後、文禄期の火災による炎上を契機に豊臣政権下で移転が図られ、それを継承した徳川家の援助を受けて、十七世紀初頭に上京西陣の地に伽藍が新造されて復興した。このように、般舟院は十七世紀のかなり早い段階で、京都近郊に所在する多くの寺院にとつて共通の荒廃状態を脱していたことに加え、洛中の御所近郊への移転にも成功していた。十七世紀前半に天皇家の追善仏事の開催が、般舟院に集中した背景にはかかる事情を想定することができよう。

一方の泉涌寺も、例に漏れず応仁の乱による伽藍焼失のダメージが大きく、それに伴つて、以後の天皇葬送儀礼が仮設建築による儀礼執行体制をとらざるを得なくなるなど、その影響が多大なものであったことは、先行研究が指摘してきた通りである。十六世紀段階では、織田信長による仏殿造立などが小規模に実施されることがあったものの、伽藍の造営が本格化することはなかった。

一方で、十七世紀に入ると、慶長十六年（一六一一）の禁裏御所紫宸殿の払い下げによる海会堂の建立、寛永十六年（一六三九）の別院雲龍院の復興、寛永十九年（一六四二）の舍利殿造営、戒光寺・悲田院などの塔頭・末寺の中興・泉山移転が進んでいく。こうした堂舎の再建、寺観の整備の背景には、後水尾天皇の泉涌寺への深い信仰と、当該期の幕府寺院政策による積極的な援助が

あった。その総仕上げともいふべき事業が寛文の大造営である。明暦期に後水尾による泉涌寺「再造之観念」が伝えられたことで、所司代牧野親成を惣奉行とした大造営が寛文年間を通じて進められ、寛文八年（一六六八）、泉涌寺の一連の堂舎は再造をみた。⁽⁶⁴⁾

こうした経緯を踏まえると、当時の泉涌寺内部において、後水尾天皇・東福門院の存在は多大なものであったことが想定される。実際に寛文の大造営で新造された位牌殿である泉涌寺霊明殿では、家祖としての陽光院と後水尾天皇・東福門院を重視した位牌の配置がなされていたことが指摘されている。⁽⁶⁵⁾ また、前章で述べたよ

うに、般舟院が専管していた中陰法要の執行が、泉涌寺において公的に認められたのがこの両者の中陰法要の時であった。さらに、貞享期には所司代稲葉正通を通じて関白一条兼輝へ、泉涌寺は「奉葬御尊骸之寺」であるとする幕府の認識が表明されている。⁽⁶⁶⁾

以上のように、寛文・貞享期頃には、朝幕双方の思惑の中で、泉涌寺が天皇家祖先祭祀の中核寺院として位置づけられていく様相が看取されるのである。

ここまでの検討と先行研究の成果を踏まえて、十七世紀末段階における天皇家との関係にみる泉涌寺と般舟院の地位について整理しておきたい。まず、般舟院は延宝期までは天皇・女院の中陰法要の執行を専管し、さらに年忌法要の執行数も全体の大半を占めるなど、追善仏事の側面では泉涌寺に対して優位性を保持して

いた。この背景には、京都近郊の諸寺院が共通して抱えた中世以来の伽藍の荒廃という状況を、般舟院が文禄・慶長期の復興によつて、早期に克復していたことが影響していたと考えられる。

その一方で、泉涌寺の復興は十七世紀初頭に後水尾天皇の主導で部分的に着手されるものの、伽藍の完全な新造には至らず、あくまで部分的な復興に留まっていた。だが、そのような中でも、承応期には火葬に伴う分骨などの問題をめぐる寺院間の争いが憂慮された結果、火葬から土葬への転換がなされ、それにより泉涌寺は天皇の遺体を管理しうる唯一の寺院としての地位を得た⁶⁷⁾。最終的に寛文の大造営によつて伽藍の再造を実現した泉涌寺は、後水尾天皇・東福門院の深い帰依を背景に、両者の中陰法要を自院で公的に執行することを朝廷に願ひ出で一時的に認められる。これは伽藍の新造による儀礼空間としての整備を待つてからの動きとしても捉えることができる⁶⁸⁾。

こうした泉涌寺の動きに対して、般舟院は貞享期の後西天皇の死去時に、火葬形式の復活を朝廷へ願ひ出る。火葬の場合、般舟院の管理する深草法華堂（安樂行院）への納骨がなされるため、天皇家との関係・由緒をより強固なものにすることを期待した動きと考えられる。だが、朝廷側は火葬への回帰を想定しておらず、逆に所司代からは、泉涌寺を天皇の被葬寺院とする認識が関白へ表明されたことで、天皇家の菩提寺としての近世泉涌寺の地位が

確立する。泉涌寺との相対的立場において、般舟院にとつての唯一のプラス事項であつたのは、延宝期に一時的に認められた泉涌寺における中陰法要の格式（着座公卿の派遣数）が、貞享期以降に継続して認可されていないことのみであつた。

第三節 十八世紀以降の般舟院と泉涌寺の対抗関係

宝永七年（一七一〇）正月、前年十二月に死去した東山上皇の中陰法要の執行をめぐり、泉涌寺は再度般舟院と同格の公卿着座のもとでの執行を朝廷に願ひ出で、時の摂政近衛家熙の判断により認可された⁶⁹⁾。天皇の被葬寺院としての地位に加え、中陰法要において般舟院と同等の格式が認められたことで、泉涌寺に対する般舟院の相対的な地位の低下はより顕著なものになったといえる。

また、十七世紀末から十八世紀初頭にかけての般舟院をめぐる変化としては、元禄期の般舟院住持兼帯状況の解消と享保期の般舟院焼失に伴う再建時の動向が注目される。以下、この二点から当該期の般舟院について考察したい。まず次に示すのは、般舟院の住持兼帯状況の変化を説明している『会所般舟院大体記書』の一節である。

【史料6】⁷⁰⁾

元来、般舟院者二尊院之分流ニ而御座候、其訳者後土御門院

離宮を般舟院三昧院と号分故、二尊院十三世善空（被兼職西山三鈺寺）被下置、開基被為 仰付、文明十二年十二月三日論（綸）旨茂有之、以来代々二尊院・三鈺寺・遣迎院等々入院兼職仕候儀、開山善空以来数重代ニ及び、般舟院専住と相成候者、近代陽空申る以来纔五六代之儀ニ御座候、然ル処近年般舟院儀自立他例仕、

【史料6】で、般舟院は「二尊院之分流」であり、西山三鈺寺を「兼職」していた「二尊院十三世善空」が開基を仰せ付けられて創建されたとする。それ以来、般舟院住持は「代々二尊院・三鈺寺・遣迎院等々入院兼職」の状態にあつたとされ、「専住」となつたのは、「近代陽空申る以来纔五六代之儀」であつたという。般舟院住持陽空は、元禄五年（一六九二）に入院していることから、般舟院は伏見の地に創建され、文禄・慶長年間の洛中への移転を経た後も、基本的には二尊院を始めとした寺院の住持が兼帯している状況にあり、ようやく専住が置かれたのが元禄期のことであつた。

ここまで述べてきたように、当時は泉涌寺が自院における天皇・女院の中陰法要の執行を相次いで願ひ出て、その一部が朝廷より認可されるなど、泉涌寺の天皇家追善仏事への進出が顕著になつていた時期であつた。元禄期の般舟院・御黒戸寺院の様相を

示す一次史料は、現時点で確認できておらず、専住が置かれた背景には、寺院経営などのその他様々な理由も想定される。だが、天皇家との関係という点に即していうならば、追善仏事をめぐる泉涌寺の積極的な姿勢に対応するために、般舟院の寺務に専念できる専住が置かれたと説明することはさほど不自然ではないのではなからうか。

十七世紀後半以来、天皇家追善仏事をめぐる泉涌寺と般舟院との対抗関係が徐々に立ち現れてくるなか、享保十五年六月二十日、上立売通室町西二入町の大文字屋五兵衛宅からの出火が近隣の般舟院位牌殿へ燃え移り、天皇・女院らの「御位牌」や「御本尊始不動尊・地藏尊」などの仏像類の焼失こそ免れたものの、本堂を始めとした般舟院伽藍は多大な被害を蒙つた。これを受けて、般舟院は再建を朝廷へ願ひ出ることになるが、⁽¹²⁾ 当時は朝廷財政が「不如意」であることから、現実的には幕府に対して臨時の財政出動を求める必要があつた。次に示すのは、『般舟院類焼并再建願之記』享保十五年九月二十二日条である。

【史料7】⁽¹³⁾

同年九月廿二日、伝 奏る御尋有之、園大納言殿（基香、武家伝奏）江書付指出候、右御尋之訳者諸（所）司代牧野河内守殿（英成）より、般舟院と泉涌寺御寺と申両寺ニ在之候儀者

如何成御事ニ候哉、其訳可申上旨御尋御座候ニ付、当院之儀格別之御寺と申訳、左之通書付を以申上候御事ニ御座候、

一、般舟院之儀、堀川院御宇於山城国霞谷草創有之、其後

後堀河院以当院被為成仙洞御内道場、御代々禁裏御黒戸²

与相立 御位牌奉安置候御事ニ御座候、右之由緒故歟、

前々より 天子御代々御誕生日之御祈禱、当院江被為

仰付奉執行、毎月御巻数差上、御下行拝領仕来候御事、

一、後土御門院御宇以来、毎年正月御末広扇子当院江被為下

之、元日之御茶并 御膳具之梅干茎献上仕来、至只今断経

無御座候、且又 禁裏御安置之元三大師之像、毎年極月

末当院御申出、元日より奉掛之諸礼之間、右之像を御所江

返上仕候、

右外々寺院ニ無之候儀ニ承候事、

正親町院御宇 先帝後奈良院御中陰専於当院可奉修之旨、

女房御奉書被成下候、右御奉書別紙写差上候、

③一、般舟院之儀者 禁裏御仏殿、泉涌寺者御葬礼所ニ而御

座候故、毎度御法事之所当院者重ク被 仰付候御事、

一、御代々御中陰之節并御年回之聖忌之節者於当院泉涌寺両

寺御法事有之候、毎年御正忌之御法事者当院斗江被 仰付、

於他寺者御沙汰無御座候事、

右之所ニ而 禁裏 院中御寺与申儀当院第一御座候、宜御

沙汰奉願候、以上

(享保十五年) 戊九月

般舟院本空印

【史料7】は、武家伝奏園基香へ提出された般舟院再建に関する願書が留められている部分である。願書が提出されるに至った経緯としては、所司代牧野英成より、般舟院と泉涌寺と「御寺」と称す寺院が二つ存在することに疑義が出され、その理由が武家伝奏を通じて般舟院へ尋ねられたことが発端であった(傍線部①)。これに対して、般舟院は提出した願書の中で、泉涌寺と共通する自院の機能として「禁裏御黒戸与相立 御位牌奉安置」ことをあげ、さらに天皇誕生日に祈禱を仰せ付けられてそれを執行していること、毎月御経を献上して下行を拝領していること、毎年正月に「末広扇子」を下賜されていること、元日に「御茶」や「御膳具」などを献上し、禁裏御所に安置されている元三大師像を借り受け揭示していること、の四点を他寺院にはみられない般舟院独自の天皇家との由緒として主張する(傍線部②)。また、般舟院は、自らは「禁裏御仏殿」、泉涌寺は「御葬礼所」であるとの認識を示し、泉涌寺はあくまで天皇家の被葬寺院であるとした上で、「御中陰之節并御年回之聖忌之節」、すなわち中陰法要と「年忌法要」の際は、「当院泉涌寺両寺」で法要が行われると説明する。その一方

で、「毎年御正忌之御法事者当院斗江被 仰付、於他寺者御沙汰無御座候事」と般舟院の専管事項としては、毎年行われる「回忌法要」があると主張することで、これらの法要には泉涌寺を含む他寺院の関与が全くないことを強調している（傍線部③）。

般舟院の主張は、泉涌寺を「御葬礼所」と位置づけ、宝永期の朝廷の判断によつて、泉涌寺に中陰法要の公的な執行権が付与されたことまでもを認識した上で、毎年の忌日に行われる歴代天皇・女院の「御正忌之御法事」を専管する「禁裏御仏殿」であることに自院のアイデンティティを認め、それを論拠に自らを「当院之儀格別之御寺」であると位置づけることで、所司代の「御寺」が二つ存在することへの疑義に応答するものであった。

こうした般舟院側の主張を容れて、所司代牧野は公儀普請による般舟院再建を決定する。工事の完了は享保十七年とされ、建物の坪数が若干減じられたものの、最終的に関東から「七百両」の臨時財政の出動がなされ、般舟院の再建は実現に向かった。⁶²¹

以上のように、享保期の般舟院焼失から再建に至る過程では、葬送儀礼・中陰法要・「年忌法要」を担う泉涌寺と、中陰法要・「年忌法要」・「回忌法要」を担う般舟院という二つの御寺が天皇家の追善仏事の機能を分掌していることが明確に武家に把握された。近世に存在した二つの御寺による体系は、以上を基本的枠組みとして、以後展開することになる。

享保期以降、天皇家の追善仏事をめぐる泉涌寺と般舟院の動向に、従来と異なる動きはしばらく確認できなくなる。だが、十八世紀後半になると、それまでの体制に変化が生じる。天明三年（一七八三）十一月、光格天皇は後桃園天皇の五回忌、すなわち般舟院が専管してきた「毎年御正忌」の法要において、般舟院とともに、泉涌寺においても法要を開催した（表3）⁵²⁰。これは史料上は「内々法事」と表記され、般舟院に派遣されていた着座公卿の派遣は泉涌寺にはなされておらず、あくまで非公式な要素が強いものであったようである。だが、般舟院が自らの特権として認識していた「回忌法要」に、泉涌寺が介入したことの持つ意味は大きかったと思われる。こうした方針は次代の仁孝天皇へも引き継がれており、天保十四年（一八四二）十一月の光格天皇の四回忌の際にも、「内々法事被仰付」とされながら、泉涌寺において法要が執行されている（表3）⁶²²。十八世紀後半以降には、それまでは般舟院が専管し、享保期には自院特有の機能として般舟院のアイデンティティを構成する重要な要素であった「毎年御正忌」の法要までもが、泉涌寺において開催される状況が常態化しつつあった。

また、寛政十二年（一八〇〇）四月には、光格天皇の第一皇子である温仁親王（光格正配中宮欣子の所生）の被葬寺院をめぐり、泉涌寺と般舟院が対立する。それまでは天皇正配所生の嫡出皇子女

が早世した場合は、般舟院が被葬寺院とされ、葬礼も挙行しないことが通例と認識されていた。だがこの際はそれが覆され、泉涌寺が被葬寺院とされたことに加え、葬礼自体も挙行されたのである。この方針は十九世紀以降にも継承され、嫡出皇子女の被葬寺院は、泉涌寺もしくはその別院雲龍院へ固定化されてゆく。早世した皇子女の被葬寺院として泉涌寺を補完する機能を有していた般舟院にとつては、さらなる地位の後退として捉えうる事象であつた。⁽⁷⁾ このように、光格天皇の時代には、葬送儀礼・追善仏事の双方の側面で泉涌寺が重視される傾向が見られるようになる。葬送儀礼に関しては、傍系から皇位を継承した光格以降の天皇が従来の皇統との連続性を強調するために泉涌寺への葬送を重視する方針をとつたと理解することができようが、追善仏事の側面においても泉涌寺を重視する志向性が新たにみられることは興味深い。

こうした状況におかれた近世後期の般舟院・御黒戸寺院の具体的な動向については、今後さらに検討を深める必要がある。また、幕末維新期には、神式皇霊祭祀の確立が目指され、仏教勢力の排除を目論む勢力が台頭する。⁽⁸⁾ さらに寺院における仏式の祖先祭祀という観点では、最終的に明治九年（一八七六）の尊牌合併令において、旧山城国内の寺院が所持する天皇・女院らの位牌が泉涌寺に集約されるに至る。⁽⁹⁾ このことを念頭に置くと、仏事をめぐ

る天皇の方針、あるいは天皇家と寺院との関係の中で、泉涌寺を重視する志向性が十八世紀後半段階で確認できることは、幕末維新期における天皇家祖先祭祀のあり方を考える前提として重要な要素であるように思われる。

おわりに

本稿では、寺院において開催された近世天皇家の追善仏事の執行体制、さらに、それを主導した泉涌寺と般舟院を始めとする御黒戸寺院の地位の変遷に関する基礎的事実の提示に重きを置いて、検討を進めてきた。

近世天皇・女院の追善仏事は中陰法要、「年忌法要」、「回忌法要」に大別される。葬送儀礼に続いて挙行される中陰法要は、十七世紀初頭には般舟院が専管していたが、十七世紀末く十八世紀初頭にかけて、泉涌寺における執行が段階的に朝廷に認められていき、宝永期に同格の格式での執行権が認可されるに至る。また、「年忌法要」・「回忌法要」は、天皇の場合は泉涌寺・般舟院を中心に、女院の場合は両寺院に各女院の被葬寺院を加えて執行される体制がしかれていた。

さらに、近世における天皇家追善仏事の展開をみる上での最大の特徴は、十七世紀には頻繁に開催されていた宮中法会の割合が

次第に減少していく反面、寺院に委任する形での仏事の開催が恒常化し、大多数を占めるようになることである。本稿では寺院において開催された追善仏事に検討対象を絞ったため、十分に言及することができなかったが、この問題は各天皇の仏教信仰のあり方と、宮中法会における門跡を含めた大寺院の関与という点を踏まえて考える必要がある。また、こうした転換をめぐっては、中世国家において一権門として君臨した寺院勢力が、近世への移行に伴い、その権限や勢力を大きく減退させるという仏教界全体の動向との関連も考慮する必要がある。

また、泉涌寺・般舟院での開催が大部を占める近世天皇家の追善仏事は、葬送儀礼同様に所司代・上方譜代藩を中心に武家による中陰法要の警衛がなされ、近世後期には禁裏附による「年忌法要」・「回忌法要」の管理体制が定着していた。また、追善仏事関連の費用は幕府の主導による臨時の財政出動がなされていた。各法要の問題をめぐり、武家が強権的な介入をみせる様相は確認できず、協調を基本とする近世朝幕関係の基本的なあり方に対応して、寺院における追善仏事を執行する体制は維持されていたといえる。

追善仏事の開催場所は近世を通じて般舟院がもつとも多いが、十七世紀後半以降は、泉涌寺による台頭が顕著になる。これは、般舟院が文禄・慶長期に伽藍の復興を果たしたことに對して、泉

涌寺の復興は後水尾天皇・東福門院の帰依を背景とした朝幕双方の意向のもと、寛文期に一挙に進んだためであった。その後、泉涌寺における中陰法要、「年忌法要」の開催は次第に定着していき、享保期に般舟院が火災により焼失した際には、所司代より「御寺」が二つ存在することに疑義が出されるに至る。この再建問題をめぐり、般舟院は自院を「毎年御正忌」を専管する「禁裏御仏殿」であるとの主張を展開し、結果として般舟院は公儀普請の形で再建された。これは泉涌寺と般舟院が天皇家の葬送儀礼・追善仏事（中陰・年忌・回忌）をどのように分掌しているのか幕府が再確認した点で大きな意味合いを持った。だが、十八世紀後半には、泉涌寺における「回忌法要」の開催や、従来般舟院へ葬送されていた嫡出皇子女の被葬寺院の泉涌寺への変更などにより、般舟院のアイデンティティは泉涌寺によつてさらに奪われていくことになる。十九世紀から幕末維新期にかけての天皇家祖先祭祀、さらにそれをめぐる天皇家と寺院・仏教との関係を考えるには、このような歴史的経緯を前提として理解しておく必要がある。

以上をまとめると、近世天皇家の追善仏事をめぐる泉涌寺と般舟院の展開は、般舟院が中世以来、自院特有のものとして保持してきた天皇家の追善仏事を執行する寺院としての機能を、泉涌寺が徐々に侵食し、その地位に並び超越していく過程として捉えられよう。その契機となったのは、承応期の火葬から土葬への葬法

の転換に伴う泉涌寺による天皇の遺体の独占に加え、寛文期の泉涌寺大造営に伴う天皇家の位牌殿としての霊明殿の成立であった。だが、十七世紀後半以降も般舟院を始めた御黒戸寺院は、追善仏事を主導する寺院としての機能を完全に喪失させることはなく、幕末期までその立場を維持し続けた。このように両寺院の対抗関係の中で、近世天皇家の祖先祭祀の体系が推移した点に留意しておきたい。

本稿は、近世天皇家の追善仏事の執行体制、ならびに、それをめぐる泉涌寺・般舟院の地位と天皇家との関係の変遷に関する基礎的事項を大枠で追ったに過ぎない。今回明らかにした枠組みを前提に、今後は各時期の泉涌寺・御黒戸寺院の動向をより精緻化していく必要がある。また、幕末維新期に神式皇霊祭祀の形成が目指され、寺院・仏教自体が天皇家との関係において否定的に捉えられるようになる時代状況の中で、泉涌寺と般舟院、御黒戸寺院がどのような動きをみせたのか、この点についても、具体的な説明が求められているといえる。以上の点は、いずれも今後の課題としたい。

注

(1) 赤松俊秀監修、総本山御寺泉涌寺編『泉涌寺史 本文篇』（法蔵館、一

九八四年）、石野浩司「泉涌寺における明治期「霊明殿」の成立―皇室祭祀と御寺泉涌寺の関係―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊五二、二〇一五年）、同「泉涌寺における明治期「霊明殿」の成立についての再考―京都御所「御黒戸」処分顧末考―」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊五七、二〇二〇年）。

(2) 野村玄「近世天皇葬送儀礼の確立と皇位」（同『日本近世国家の確立と天皇』清文堂出版、二〇〇六年、初出二〇〇三年）。

(3) 久水俊和「天皇家」葬礼の変遷（同『中世天皇家の作法と律令制の残像』八木書店、二〇二〇年、初出二〇一四年）。

(4) 拙稿「近世天皇葬送儀礼の歴史的変遷」（『ヒストリア』二八七、二〇二一年）。

(5) 拙稿「近世天皇家の葬制の変容と泉涌寺―女院・皇子女死去時の対応を中心に―」（『日本史研究』七〇四、二〇二一年）。

(6) 山口和夫「神仏習合と近世天皇の祭祀」（同『近世日本政治史と朝廷』吉川弘文館、二〇一七年、初出二〇一四年）。

(7) 川上貢「般舟三昧院について」（『日本建築学会論文報告集』六六一、一九六〇年）。

(8) 高橋大樹「般舟三昧院の成立と展開」（公益財団法人世界人権問題研究センター前近代研究班報告レジュメ、二〇一七年一月十九日）。

(9) 前掲『泉涌寺史 本文篇』、久水俊和「天皇家」の追善仏事と皇統意識（前掲『中世天皇家の作法と律令制の残像』初出二〇一五年）、河内将芳「史料紹介（弘治三年十一月二十一日）正親町天皇女房奉書写」（『奈良史学』三八、二〇二二年）。

(10) 御黒戸寺院を取り上げた研究としては、高橋大樹「室町・戦国期二尊院の再興と「勧進」―法然廟・檀那・菩提所―」（『佛教史学研究』五五―二、二〇一三年）が中世の二尊院を素材に検討を行っており重要である。御黒戸寺院を取り上げた研究が進んでこなかった要因としては、御

黒戸寺院自体の研究調査活動がさほど進んでいないことがあげられる。

また、般舟院の場合は、明治初頭に寺地が上知の対象となったことで伽藍の多くが失われ、さらに皇室からの下賜金がなくなつたことで寺院自体の荒廃も進み、平成に入ってから完全に廃絶したことの影響が大きい。現在般舟院旧蔵資料は所在不明であり、宮内庁書陵部にわずかに残る写本類しか参照できない状況にある。だが、近世の般舟院は、二尊院・廬山寺・遣迎院などの他の御黒戸寺院と共同で天皇家の追善仏事に参画しており、これらの寺院史料から一連の問題を論じる余地が残されている。こうした寺院史料の本格的な利用・検討は今後の調査の進展を待たざるを得ないが、本稿では、近世の公家日記に加え、前述の宮内庁書陵部所蔵写本などの御黒戸寺院側の史料を一部援用して検討を進める。近世天皇家の追善仏事に関する基礎的事実の解明を主題に据えつつ、今後、般舟院・御黒戸寺院の実態解明を進めてゆく上での研究基盤の共有にも貢献したい。

(11) 武田秀章『維新时期天皇祭祀の研究』（大明堂、一九九六年）。

(12) 上田長生「幕末維新期の陵墓・皇霊祭祀の形成」（同『幕末維新期の陵墓と社会』思文閣出版、二〇一二年、初出二〇〇五年）。

(13) 阪本健一「皇室に於ける神仏分離」（神道文化会編『明治維新神道百年史』第四卷、一九六八年）、阪本是丸「日本型政教関係の形成過程」（井上順孝・阪本是丸編『日本型政教関係の誕生』第一書房、一九八七年）、高木博志「明治維新と大嘗祭」（同『近代天皇制の文化史的研究―天皇就任儀礼・年中行事・文化財―』校倉書房、一九九七年、初出一九八七年）、羽賀祥二『明治維新と宗教』（筑摩書房、一九九四年）。明治初年の京都御所御黒戸の泉涌寺遷座に関しては、石野浩司氏が、御黒戸建築が泉涌寺へ移転したわけではないことを指摘した上で、御黒戸由来の仏体を始めとする天皇家ゆかりの念持仏・尊牌などが多様なルートで泉涌寺へ集積された過程を具体的に明らかにしている（前掲石野「泉涌寺における

明治期「靈明殿」の成立についての再考」）。

(14) 田中秀和『幕末維新期における宗教と地域社会』（清文堂出版、一九九七年）、阪本是丸「神仏分離研究の課題と展望」（同『近世・近代神道論考』弘文堂、二〇〇七年、初出二〇〇四年）、藤田大誠「幕末維新期における宮門跡の還俗に関する一考察―「中央の神仏分離」研究の一環として―」（『國学院大学日本文化研究所紀要』九六、二〇〇五年）など。

(15) 高木博志「皇室の神仏分離・再考」（明治維新史学会編『明治維新史研究の今を問う―新たな歴史像を求めて―』有志舎、二〇一一年）、辻岡健志「皇室の神仏分離とその後の仏教―宮内省の対応を中心に―」（『書陵部紀要』六九、二〇一七年）、前掲石野「泉涌寺における明治期「靈明殿」の成立―皇室祭祀と御寺泉涌寺の関係―」、同「泉涌寺における明治期「靈明殿」の成立についての再考」。

(16) 石川泰志『近代皇室と仏教』（原書房、二〇〇八年）、高木博志「近代皇室における仏教信仰―神仏分離後の泉涌寺を通して―」（『祭祀資料研究会編『祭祀研究と日本文化』塙書房、二〇一六年、山口輝臣「天皇家の宗教を考える―明治・大正・昭和―」（『史淵』一四九、二〇一二年）、上田長生「明治前期の陵墓・皇霊祭祀の特質」（高木博志編『近代天皇制と社会』思文閣出版、二〇一八年）など。

(17) 前掲『泉涌寺史 本文篇』。

(18) 前掲高橋「般舟三昧院の成立と展開」。

(19) 田辺隆邦「善空上人の教化」（『西山学報』二二、一九七二年）、大山喬平編『浄土宗西山派と三站寺文書』（京都大学文学部博物館の古文書第九輯、思文閣出版、一九九二年）。

(20) 『雍州府誌』（黒川道祐著、貞享元年（一六八四）成立、『新修 京都叢書』第十卷、臨川書店、一九六八年）、『山州名跡志』（沙門白慧著、正徳元年（一七一）成立、『新修 京都叢書』第十五卷、臨川書店、一九六九年）、『都名所図会』（秋里離島著、安永九年（一七八〇）成立、『新修京

都叢書』第六卷、臨川書店、一九六七年)。なお、『雍州府誌』は、般舟院を「天台真言禪律四宗兼学之道場」とするが、創建以来の浄土宗西山派の関与を考慮すると、四宗に浄土宗が入っていない点は不自然に感じられる。

- (21) 後藤みち子「中世公家の墓制にみる夫婦と「家」」(『総合女性史研究』二三、二〇〇六年)。

- (22) 的場匠平「近世公家社会における葬祭と寺院」(『蓮花寺佛教研究所紀要』八、二〇一五年)。

- (23) 前掲久水「天皇家」の追善仏事と皇統意識」七三〜七五頁。

- (24) 以下の記述は、前掲拙稿「近世天皇葬送儀礼の歴史的変遷」五〇〜一〇頁にて、既に詳細を論じている。

- (25) 中陰法要は、初七日・二七日・三七日・四(中)七日・五七日・六七日・七(結)七日の計七日間の法要を経て結縁を迎える。

- (26) 『般舟院類焼并再建願之記』端書(宮内庁書陵部所蔵写本)。以下、本稿における史料引用では、(〽)は割注、(〽)内は筆者による傍注を示す。また、闕字は一字空け、平出は二字空けで示している。

- (27) 前掲『泉涌寺史 本文篇』、前掲拙稿「近世天皇家の葬制の変容と泉涌寺」。將軍家から入内した唯一の存在である東福門院は、女院附武家が常駐する独自の御所機構や皇位継承問題、奥向統制などをめぐり影響力を有したことなど、その特異性が指摘されている(前掲野村「日本近世国家の確立と天皇」、石田俊「靈元天皇の奥と東福門院」(同「近世公武の奥向構造」吉川弘文館、二〇二一年、初出二〇一一年)、村和明「近世朝廷の制度化と幕府―東福門院和子の御所を中心に―」(『日本史研究』六一八、二〇一四年)、なお、東福門院の生涯は、久保貴子『徳川和子』(吉川弘文館、二〇〇八年)を参照)。さらに、近世後期の女院の死去時には、泉涌寺廟所に設けられる石塔造立をめぐり、東福門院の格式を越えないようにする対応がなされているなど(的場匠平「月輪陵域内所在陵墓石

塔に見る近世天皇・皇族の墓制」(『書陵部紀要 陵墓編』六九、二〇一七年)、拙稿「文政く弘化期の朝廷における新清和院の地位―仁孝天皇との関係を中心に―」(『史林』一〇五一、二〇二二年)、死後の格式をめぐっても東福門院の特異性を窺うことができる。

- (28) 般舟院は創建以後、浄土宗西山派の寺院により管理されていたが、十七世紀以降の天皇家追善仏事に際しては、天台系寺院との関係が強くなっている様相が窺える。こうした体制がとられるようになった経緯・背景については、近世を通じた般舟院・御黒戸寺院と天台宗との関係の展開を検討する必要がある。詳細は今後の課題としたい。

- (29) 泉涌寺本坊には原則として常住する僧侶がおらず、住持は泉山内の塔頭寺院に所属する僧侶が輪番を得て入院する。だがこうした住持は数ヶ月の内で退山することが慣例化しており、泉山全体に常に複数存在している前住持が輪番で現住持として再住することが定式化していた(次第輪住制)。泉山全体の意思決定は、長老と呼ばれた前住らの合議によってなされていたという(前掲『泉涌寺史 本文篇』)。

- (30) 年忌法要開催時の宿忌(速夜)の法要は、史料上省略されて記されていないことも多く、表中で一日開催となっている法要でも、二日間執行されている場合がある。また、「速夜御法事無之先例也」と、速夜法要が執行されず、当日のみ執行される事例も確認できる(『基量卿記』二五、元禄十年十一月七日条、宮内庁書陵部所蔵)。

- (31) 【表3・4】では、主に公家日記を中心とした古記録と泉涌寺・般舟院に残された史料を典拠としたが、史料の残存状況によって、ほぼ確実に法要が開催されたと考えられるものの、法要の記事自体が典拠史料から確認できない時があり、そのような場合は一覧に含めていない。【表3・4】は、近世における天皇・女院の年忌法要の総数を可能な限り復元しようとした作業の結果ではあるが、表中で示した事例が近世における全事例ではないことに留意した上で、開催場所・方式などの時期的変化、傾

向を大枠で把握するために参照する。

(32) 泉涌寺に残る近世後期・幕末期の日並記からは、泉涌寺に葬られた天皇・女院・皇子女らの忌日に、公卿着座や代参使者の派遣など天皇家・朝廷の関与が全くみられないなか、寺僧を中心に法要が執り行われている事例を複数例確認することができる。度重なる火災の影響で、天保期以前の泉涌寺日並記は残存しているものが少ないため、それ以前の様相は不明瞭であるが、無礙光院（知恩院宮良純入道親王）など泉涌寺に葬られた人物の忌日には同様の対応がとられていることから、所縁のある人物の法要に関しては、朝廷からの公的な執行が指示されていない場合でも法要が執り行われることがあった。一方、般舟院に関しては、泉涌寺のような日並記の存在が現時点で確認できていないため、寺院独自の法要が執り行われていたかどうかは、現状不明とせざるを得ない。

(33) 閑院宮家は、十八世紀初頭の創設以来、廬山寺を菩提寺としており、初代直仁親王以下、歴代当主の墓所は同寺境内に設けられていた。光格天皇の実父閑院宮典仁親王の場合は、明治十七年（一八八四）に太上天皇の尊号と慶光天皇の諡号が追贈されたことで、現在は廬山寺陵として宮内庁の管轄下におかれている。また、安政期頃には光格上皇付の薙髪女房が光格の遺言を伝えたことを契機として、廬山寺境内に「尊牌殿」を新規造営する動きを確認することができる。この点は、従来の天皇家仏事の体系に留まらない「閑院宮系」の仏事としての側面が想定されよう。詳細は今後の課題としたい。

(34) 在位中の天皇の死による忌日の相違について付言しておく。近世に在位中に天皇が死去した場合、江戸から次帝の踐祚が認可されるまでの期間は、「秘喪」とされるため（高埜利彦「江戸時代の皇位継承」（朝幕研究会編『論集 近世の天皇と朝廷』岩田書院、二〇一九年）、死去した実際の忌日と、死去が公表された公的な忌日に相違が生じる。「天皇御沙汰」の法要は死去が公表された日を忌日として開催されるが、上皇・女

院の沙汰による法要は、実際に死去した日を忌日として開催される事例も確認できる。こうした点からは、「天皇御沙汰」による年忌法要は朝幕双方が正式な追善仏事と認識している法要とも言い換えられよう。逆に言えば、上皇や女院などの天皇以外が主催する法要は、それほど公的な性格を有していなかったといえるのではなからうか。

(35) 未婚かつ出家（比丘尼御所入室）もしていない内親王は、時期によっては少数であるものの存在しており、彼女らの主催による法要は天皇家の追善仏事の範疇で捉えている。

(36) 親子関係（中御門天皇―東山天皇、桜町天皇―中御門天皇、後桜町天皇―桜町天皇）、養子関係（靈元天皇―後光明天皇、姉弟関係（後桜町天皇―桃園天皇）、祖父孫関係（桜町天皇―東山天皇）など、追善対象との関係に基づいて「回忌法要」が執行されている。

(37) 久保貴子『近世の朝廷運営』（岩田書院、一九九八年）、同「近世の内親王と女院」『歴史と地理』六〇〇、二〇〇六年。

(38) 後西天皇正配である明子女王は、近世の天皇正配では唯一泉涌寺へ葬送されておらず、后位・女院号も得ていない。これは明子女王が高松宮好仁親王の王女として誕生し、後西は皇位継承前に明子女王と婚姻関係を結ぶことで高松宮家を相続していたことが前提にあつたためと思われる。明子女王の墓所は高松宮家菩提寺の大徳寺龍光院に設けられており、追善仏事も高松宮家の範疇で執行されたのであろう。

(39) 前掲掲場「月輪陵域内所在陵墓石塔に見る近世天皇・皇族の墓制」、前掲拙稿「近世天皇家の葬制の変容と泉涌寺」。

(40) 逢春門院（後西天皇生母）に関しては、天皇の沙汰ではなく、実子の親王らの主催によつて年忌法要が執行されている（『堯恕法親王日記』二、貞享三年五月二十二日条（吉川弘文館、一九八四年）、『般舟三昧院御用日次拔書』（宮内庁書陵部所蔵写本）。これは逢春門院の葬送儀礼が「宮方之沙汰」として執行されていることに倣った対応（前掲拙稿「近世天

皇家の葬制の変容と泉涌寺」九・一〇頁）と同様のものと思われる。

- (41) 天保十二年（一八四一）の泉涌寺焼失に伴う措置であり、東京極楽の葬送時の法要は新善光寺で執行され、被葬寺院は雲龍院とされた。但し、格式としては泉涌寺への葬送として認識されている（前掲拙稿「近世天皇家の葬制の変容と泉涌寺」二二～二三頁）。

- (42) 但し、清浄華院における年忌法要の執行のみ「内々」と記される（禁裏執次詰所日記）寛政七年九月二十一日条（『光格天皇実録』八三五頁）など。清浄華院は御黒戸寺院に属すわけではなく、それまで天皇家の追善仏事に関与することも確認できないため、例外的にこのような形式がとられたものと考えられる。

- (43) 前掲野村「近世天皇葬送儀礼の確立と皇位」。

- (44) 『後光明院御中陰法事』（肥前島原松平文庫所蔵写本、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」を使用）。

- (45) 『兼輝公記』六、延宝九年八月十九日条（東京大学史料編纂所架蔵謄写本、同「所蔵史料目録データベース」を使用）。

- (46) 『禁中附武家百ヶ条』（東京大学史料編纂所所蔵写本、同「所蔵史料目録データベース」を使用）。本史料については、細谷篤志氏より御教示いただいた。

- (47) 前掲『泉涌寺史 本文篇』三三九～三四六頁。

- (48) 『泰重卿記』一四、寛永七年七月十七日条（宮内庁書陵部所蔵、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」を使用）。

- (49) 『公通記』六、元禄九年八月十八日条（東京大学史料編纂所所蔵）など。

- (50) 『公全公記』三七、正徳二年八月九・十日条（東京大学史料編纂所所蔵）。

- (51) 『資廉日記』下、元禄十一年十一月九日条（宮内庁書陵部所蔵写本、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」を使用）、『公通記』八、元禄十一年十一月九日条。

- (52) 奥野高廣『皇室御経済史の研究 後編』（畝傍書房、一九四四年）、佐藤

雄介『近世の朝廷財政と江戸幕府』（東京大学出版会、二〇一六年）。

- (53) 高埜利彦「江戸幕府の朝廷支配」（同『近世の朝廷と宗教』吉川弘文館、二〇一四年、初出一九八九年）。

- (54) 宮中法会の執行体制とその変遷、それをめぐる天皇家と寺院・門跡との関係については、別稿で検討を予定している。

- (55) 前掲川上「般舟三昧院について」。

- (56) 『正親町院御中陰御法事記』（東京大学史料編纂所所蔵写本、同「所蔵史料目録データベース」を使用）。

- (57) 『会所般舟院大体訳書』（二尊院文書、二尊院所蔵）。なお、本史料は高橋大樹氏より御教示いただいた史料であり、前掲高橋「般舟三昧院の成立と展開」で既に紹介されている。

- (58) 前掲高橋「般舟三昧院の成立と展開」。

- (59) 『おゆどのうへへの日記』文禄四年三月十日、五月十七日条（『続群書類従』所収）。

- (60) 『言経卿記』九、慶長四年正月五日条（岩波書店、一九七三年）。

- (61) 『言経卿記』十一、慶長六年六月十一日条（岩波書店、一九八〇年）。

- (62) 『般舟院類焼并再建願之記』享保十五年六月二十一日条。実際に般舟院伽藍が完成した慶長六年は、正確には徳川家康の將軍就任前であるが、関ヶ原の戦いを挟む豊臣政権の終焉期に、洛中の地に伽藍の新造が実現している以上、何らかの形で徳川家の援助がなされた可能性が高い。

- (63) 前掲『泉涌寺史 本文篇』三一七～三三二、三三九・三三〇、三三三～三三五頁。

- (64) 寛文の大造営の詳細な過程については、『泉涌寺再興日記』（『泉涌寺文書』二二二）、『泉涌寺史 資料篇』法蔵館、一九八四年）を参照。

- (65) 前掲石野「泉涌寺における明治期「靈明殿」の成立」二一八頁。

- (66) 『兼輝公記』一四、貞享二年二月二十五日条、前掲拙稿「近世天皇葬送儀礼の歴史的変遷」七・八頁。

- (67) 前掲野村「近世天皇葬送儀礼の確立と皇位」、前掲久水「天皇家」葬礼の変遷」。
- (68) 中陰法要を始めとする天皇家の追善仏事への参入を目指した延宝期の泉涌寺の動向は、葬礼を禪・律・念仏系の僧侶が担い、中陰・年忌の法要を顯密系の僧侶が担うとした中世以来の王家（天皇家）の葬祭の分業体制（大石雅章『日本中世社会と寺院』清文堂出版、二〇〇四年）の転換という観点からみても興味深い。現時点で、筆者にこの問題を論じる準備はないが、中世から近世にかけての天皇家と仏教・寺院との関係を捉える上で、より議論を深めるべき問題と思われる。さらなる後考を待ちたい。
- (69) 前掲拙稿「近世天皇葬送儀礼の歴史の変遷」九・一〇頁。
- (70) 『会所般舟院大体訳書』。
- (71) 『般舟院類焼并再建願之記』享保十五年六月二十日条。
- (72) 『兼香公記』一一〇、享保十五年六月二十日条（東京大学史料編纂所架蔵謄写本、同「所蔵史料目録データベース」を使用）。
- (73) 『般舟院類焼并再建願之記』享保十五年九月二十二日条。
- (74) 『般舟院類焼并再建願之記』享保十六年二月十二日、四月十四日、十二月二十二日条。
- (75) 「禁裏執次詰所日記」天明三年十一月九日条（『光格天皇実録』二七三・二七四頁）。
- (76) 「禁裏執次詰所日記」天保十四年十一月十九日条（『仁孝天皇実録』一〇一〇～一〇一二頁）。
- (77) 前掲拙稿「近世天皇家の葬制の変容と泉涌寺」一五～二〇頁。
- (78) 前掲武田『維新时期天皇祭祀の研究』。
- (79) 前掲石野「泉涌寺における明治期「靈明殿」の成立についての再考」一三八・一三九頁。

〔付記〕本稿は、二〇二二年七月十一日の大阪歴史科学協議会前近代史部会、ならびに同年十月四日の朝幕研究会例会にて報告した内容をもとにしており、JSPS科研費特別研究員奨励費[19]20379の助成を受けたものである。

【参考地図】



国土交通省国土地理院の日本地図（電子国土 Web を使用）に筆者が加筆して作成。

表1 中陰法要執行体制の変遷

	名前	般舟院		泉涌寺	
		開催の有無	着座公卿	開催の有無	着座公卿
1	正親町天皇	○ (二尊院)	不明	×	—
2	後陽成天皇	○	全	×	—
3	中和門院	○	不明	×	—
4	後光明天皇	○	全	○	無
5	東福門院	○	全	○	初中結
6	後水尾天皇	○	全	○	全
7	後西天皇	○	全	○	初中結
8	明正天皇	○	全	○	初中結
9	新上西門院	○	初中結	○	初中結
10	東山天皇	○	全	○	全
11	承秋門院	○	初中結	○	初中結
12	靈元天皇	○	全	○	全
13	中御門天皇	○	全	○	全
14	桜町天皇	○	全	○	全
15	桃園天皇	○	全	○	全
16	後桃園天皇	○	全	○	全
17	盛化門院	○	初中結	○	初中結
18	青綺門院	○	初中結	○	初中結
19	恭礼門院	○	初中結	○	初中結
20	後桜町天皇	○	全	○	全
21	光格天皇	○	全	○	全
22	仁孝天皇	○	全	○	全
23	新清和院	○	初中結	○	初中結
24	新朔平門院	○	初中結	○	初中結

* 正配（女御）として入内することなく天皇生母・女院となった後宮女房、ならびに死去時に后位についていなかった正配に関しては、葬送儀礼・中陰法要が勅会として執行されていないため除外した。

** 史料上、その寺院において中陰法要の開催が確認されている場合は○、確認できない場合は×で示した。

*** 七日間行われる中陰法要の全日で公卿着座がなされている場合は「全」、初七日、中七日、結七日の三日間なされている場合は「初中結」、公卿着座が確認できない場合は「無」と表記した。

表2 般舟院・泉涌寺における中陰法要

	初七日		二七日	三七日	四七日	五七日	六七日	七七日
般舟院 後光明天皇中陰法要 承応3年(1654)	念持仏	薬師如来	弥勒尊	千手観音	地藏菩薩	釈迦如来	不動明王	阿弥陀如来
	導師(宿忌)	廬山寺 (御黒戸寺院)	宝泉坊 (大原衆)	観月院	二尊院 (御黒戸寺院)	法華八講	講師…相住坊 問者…善光院 論議	二尊院 (御黒戸寺院)
	内容	早饗法	往生講式	如法念仏	布薩			施餓鬼
	導師(当日)	實光坊(大原衆)	宝積院(山門衆)	全台院(山門衆)	向之坊(大原衆)		遣迎院 (御黒戸寺院)	般舟院 (御黒戸寺院)
	内容	聲明例時	曼荼羅供	法華頌写御経供養	聲明饗法	(山) 日嚴院大僧 都	浄土頌写御経供養	曼荼羅供
	御経供養導師	(山) 尊勝院前大 僧正	(山) 常住金剛院 前大僧正	(寺) 勸學院權僧 正	(寺) 積善院大僧 都		(寺) 若王子法眼	(山) 真珠院法眼
泉涌寺 後水尾法皇中陰法要 延宝8年(1680)	念持仏	薬師如来	弥勒尊	千手観音	地藏菩薩	釈迦如来	不動明王	阿弥陀如来
	導師	天圭和尚	円岩和尚	肯隠和尚	天圭長老	円岩長老	肯隠和尚	天圭長老
	内容	梵網講讃	法用理趣三昧	法華饗法	法用光明三昧	頌写供養	法用法華三昧	曼荼羅供

典拠：『後光明院御中陰法事』（肥前島原松平文庫所蔵写本、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」を使用）、『後水尾天皇御葬礼并御中陰記』（『泉涌寺文書』223号、『泉涌寺史史料篇』法蔵館、1984年）。

表3 近世天皇の年忌法要（正親町天皇～仁孝天皇を対象）

参考 誠仁親王（陽光院） 天正14年7月24日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 舊座	内 容	導 師	備 考	典 拠
1 一周忌	天正 15年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院（伏見）	○	阿弥陀経供養	上乘院		『おゆどのうへ日記』
2	天正 16年 7月 8 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『おゆどのうへ日記』
3 三回忌	天正 16年 7月 22～24 日	新上東門院	般舟院（伏見）	×	—	—		『おゆどのうへ日記』
4	天正 16年 7月 22～24 日	後陽成天皇	禁裏御所（後陽成）	○	懺法講	梶井宮最胤法親王		『おゆどのうへ日記』
5 七回忌	天正 20年 7月 22～24 日	後陽成天皇	禁裏御所（後陽成）	○	懺法講	梶井宮最胤法親王		『兼見卿記』
6 十回忌	文禄 4年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	—	—		『おゆどのうへ日記』
7 十二回忌	慶長 2年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	上乘院大僧正道順		『縁史愚抄』
8	慶長 3年 7月 9 日	新上東門院	准后御殿（新上東門院）	○	曼陀羅供	大覚寺空性法親王		『おゆどのうへ日記』
9 十三回忌	慶長 3年 7月 20～24 日	後陽成天皇	禁裏御所（後陽成）	○	法華八講	一乗院宮准后尊勝法親王以下延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺衆僧 10 名		『おゆどのうへ日記』
10 十五回忌	慶長 5年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	上乘院		『おゆどのうへ日記』
11 十六回忌	慶長 6年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	上乘院		『言経卿記』
12	慶長 7年 6月 22～24 日	新上東門院	女院御所（新上東門院）	○	懺法講	梶井宮最胤法親王		『言経卿記』
13	慶長 7年 7月 18～24 日	後陽成天皇	禁裏御所（後陽成）	○	懺法講	梶井宮最胤法親王		『言経卿記』
14 十七回忌	慶長 7年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	—	—		『言経卿記』
15	慶長 8年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
16 十八回忌	慶長 8年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
17 十九回忌	慶長 9年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	法華懺法	—		『おゆどのうへ日記』
18	慶長 10年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
19 二十回忌	慶長 10年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	—	—		『時慶記』
20 二十一回忌	慶長 11年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
21 二十二回忌	慶長 12年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	—	—	「はんしゆめん・せんゆきにていつものごとく御ほうじあり」	『おゆどのうへ日記』
22	慶長 13年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『おゆどのうへ日記』
23 二十三回忌	慶長 13年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	—	—	—		『おゆどのうへ日記』
24	慶長 14年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	法華懺法	日光坊		『おゆどのうへ日記』
25 二十四回忌	慶長 14年 7月 24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	—	—		『時慶記』
26	慶長 15年 7月 24 日	後陽成天皇	禁裏御所（後陽成）	○	御経供養	三井寺日光院ほか衆僧 10 名		『慶長日件録』
27 二十五回忌	慶長 15年 7月 24 日	後陽成天皇	般舟院	○	—	—		『おゆどのうへ日記』
28	元和 4年 7月 24 日	新上東門院	女院御所（新上東門院）	○	曼荼羅供	青蓮院宮尊純法親王		『孝光信條記』
29 三十回忌	元和 4年 7月 23・24 日	後陽成天皇	泉涌寺	○	懺法講	照珍長老		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
30 三十三回忌	寛永 12年 7月 24 日	明正天皇	般舟院	○	御経供養	—		『縁史愚抄』
31 五十回忌	貞享 2年 7月 24 日	德元天皇	泉涌寺	○	法華懺法	孤雲長老		『兼頼公記』
32 百回忌								

①正親町天皇 文禄2年正月5日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
34 一周忌	文禄3年正月5日	後陽成天皇	泉涌寺	—	—	—		『泉涌寺史』
35 三回忌	文禄3年12月21～25日	後陽成天皇	禁裏御所(後陽成) 清涼殿	○	法華八講	天台座主青蓮院宮尊朝法親王以下圓城寺・東大寺・興福寺衆僧	延暦寺衆僧参仕せず	『四巻之日記』
36 六回忌	慶長3年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	上乗院大僧正道順	—	『縁史愚抄』
37 七回忌	慶長4年正月5日	後陽成天皇	般舟院(伏見)	○	—	—	—	『おゆどのうへ日記』
38 八回忌	慶長5年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	上乗院大僧正道順	「上京寺門違出云々」	『言経御記』
39 九回忌	慶長6年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	成乗院僧正	—	『孝亮宿栞記』
40 十回忌	慶長7年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	上乗院大僧正道順	—	『言経御記』
41 十一回忌	慶長8年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	御経供養	—	—	『縁史愚抄』
42 十二回忌	慶長9年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	御経法	—	—	『おゆどのうへ日記』
43 十三回忌	慶長9年12月2～6日	後陽成天皇	禁裏御所(後陽成) 清涼殿	○	法華八講	圓城寺・東大寺・興福寺衆僧	延暦寺衆僧参仕せず	『おゆどのうへ日記』
44 十五回忌	慶長12年正月5日	後陽成天皇	般舟院	○	—	—	—	『孝亮宿栞記』
45 十七回忌	慶長13年12月5日	後陽成天皇	禁裏御所(後陽成) 清涼殿	○	御経供養	正覚院僧正ほか衆僧10名	—	『孝亮宿栞記』
46 二十回忌	慶長14年正月5日	後陽成天皇	般舟院	—	—	—	—	『おゆどのうへ日記』
47 二十五回忌	元和2年8月5日	後陽成上皇	仙阿御所(後陽成)	○	御経供養	南光坊大僧正海ほか衆僧10名	—	『泰重御記』

②後陽成上皇 元和3年8月26日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
48 一周忌	元和4年8月8日	後水尾天皇	般舟院	○	懺法	—	大原衆出仕	『孝亮宿栞記』
49 一周忌	元和4年8月26日	後水尾天皇	般舟院	○	曼荼羅供	藤山寺	—	『神慶記』
50 三回忌	元和4年8月25・27日	後水尾天皇	泉涌寺	○	梵皇願寫、衆議 舍利講	照參長老	—	『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
51 三回忌	元和5年8月20～26日	後水尾天皇	禁裏御所(後水尾) 清涼殿	○	懺法講	天台座主権井宮最龍法親王	南光坊僧正出仕	『泰重御記』
52 四回忌	元和5年8月25・26日	後水尾天皇	泉涌寺	○	羅供	照參長老	—	『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
53 四回忌	元和6年8月26日	後水尾天皇	般舟院	○	御経供養	三井寺僧正	—	『孝亮宿栞記』
54 五回忌	元和6年8月26日	後水尾天皇	禁裏御所(後水尾)	—	觀音懺法	保長老、師長老(相国寺衆)	—	『泰重御記』
55 七回忌	元和9年8月17～19日	中和門院	女院御所(中和門院)	○	懺法講	天台座主権井宮最龍法親王	—	『泰重御記』
56 七回忌	元和9年8月22日～26日	後水尾天皇	禁裏御所(後水尾) 清涼殿	○	法華八講	一乗院宮尊法親王ほか圓城寺・東大寺・興福寺衆僧	南光坊大僧正出仕、延暦寺衆僧参仕せず	『森日記』『寶勝御記』
57 八回忌	元和9年8月26日	後水尾天皇	般舟院	○	曼荼羅供	—	—	『寶勝御記』
58 八回忌	寛永元年8月26日	後水尾天皇	般舟院	—	御経供養	尊勝院僧正慈性	—	『宝勝御記』
59 十回忌	寛永3年8月26日	後水尾天皇	般舟院	○	御経供養	—	—	『宝勝御記』
60 十三回忌	寛永6年7月25・26日	後水尾天皇	禁裏御所(後水尾) 清涼殿	○	御経供養	曼殊院官良恕法親王	—	『孝亮宿栞記』
61 十三回忌	寛永6年8月26日	後水尾天皇	般舟院	○	御経供養	—	—	『寶勝御記』
62 十五回忌	寛永8年8月26日	後水尾天皇	泉涌寺	○	—	尊勝院慈性	—	『孝亮宿栞記』
63 十五回忌	寛永8年8月26日	後水尾上皇カ	般舟院	○	御経供養	—	—	『孝亮宿栞記』
64 十七回忌	寛永10年8月26日	後水尾上皇カ	般舟院	○	曼荼羅供	二尊院	—	『寶勝御記』
65 二十五回忌	寛永18年8月25・26日	後水尾上皇	般舟院	○	施餓鬼、曼荼羅供	一、遣迎院	—	『建房公記』『康道公記』
66 二十八回忌	寛永21年8月26日	後水尾上皇	仙阿御所(後水尾)	—	觀音懺法	慈照院所寂師長老、鹿苑寺感林堂長老、雲興軒雪峯益長老など相国寺衆13名	—	『隔笈記』
67 二十九回忌	正保2年8月19日	後水尾上皇	仙阿御所(後水尾)	—	觀音懺法	慈照院所寂師長老、鹿苑寺感林堂長老、雲興軒雪峯益長老など相国寺衆17名	—	『隔笈記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
68	慶安2年8月18日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	—	観音懺法	慈照院所叔母長老、鹿苑寺風林堂長老、雲興軒雪峯長老など相国寺衆17名		『隔笈記』『仙涌懺法并臨座拈香入室略記』
三十三回忌	慶安2年8月23～27日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	懺法講	樺井宮慈胤法親王 日光門跡尊教法親王 民沙門室公海法親王	導師の三門跡が交代で動仕	『高綱公記』『隔笈記』『続史愚抄』
69	慶安3年8月26日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	—	観音懺法	圓照寺宮文智女王	寶鏡寺、大聖寺ほか尼13名が参仕	『高綱公記 別記』
70	寛文3年4月26日	後水尾上皇	鹿苑寺	—	看経	清隆藤西堂以下4名		『隔笈記』
71	寛文6年8月7日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	—	観音懺法	瑞長老ほか相国寺衆10名	後西上皇が御幸・聽聞	『隔笈記』
72	寛文6年8月25・26日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	曼荼羅供	照高院宮守澄法親王	輪王寺宮守澄法親王が上洛して聽聞	『寛文御記』
73	寛文6年8月26日	後水尾上皇	般舟院	○	法華懺法	—		『続史愚抄』
74	享保元年8月25・26日	中御門天皇	般舟院	○	如法念仏、四箇法要	巖山寺、般舟院		『日野輝光御記』
75	百回忌	中御門天皇	泉涌寺	○	法華懺法、理題三昧	貫道長老、虎溪長老		『日野輝光御記』
76	明和3年8月25・26日	後桜田天皇	泉涌寺	○	法要	二尊院、般舟院		『柳原紀光日記』
77	百五十回忌	光格天皇	般舟院	○	如法念仏、四箇三昧	舜峯長老、高岳長老		『柳原紀光日記』
78	文化13年8月25・26日	光格天皇	泉涌寺	○	法華懺法、理題三昧	巖山寺、般舟院		『森真執次語所日記』
79	二百回忌	孝明天皇	泉涌寺	○	法華懺法、理題三昧	大圓長老、潜海長老		『禁裏執次語所日記』
80	慶應2年8月25・26日	孝明天皇	泉涌寺	○	—	—		『山科言成御記』
81	—	—	—	—	—	—		—
82	—	—	—	—	—	—		—

③後光明天皇 承応3年9月20日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
83	明暦元年9月19・20日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	観音懺法	听殺東堂、風林東堂、雲峯東堂ほか相国寺衆19名		『隔笈記』『仙涌懺法并臨座拈香入室略記』
84	—	孝子内親王	内親王御殿 (孝子内親王)	—	観音懺法	仁夷承復など相国寺衆10名		『仙涌懺法記』
85	明暦元年9月20日	後水尾上皇	般舟院	○	法華懺法	般舟院		『宣明御記』
86	—	後西天皇	般舟院	○	曼荼羅供	—		『宣明御記』
87	明暦元年9月19・20日	後西天皇	泉涌寺	○	梵唄布薩、曼荼羅供	明岳西堂、元昌西堂		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
88	明暦2年8月19・20日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	法華懺法	妙法院宮慈然法親王		『続史愚抄』
89	明暦2年9月4日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	—	観音懺法	雲雲古長老など相国寺衆20名	天竜寺妙智院補中修長老、鹿王院賢湊僧長老、建仁寺大祐院九岩達長老	『隔笈記』
90	明暦2年9月18～20日	—	禁裏御所 (後西) 清涼殿	○	懺法講	樺井宮慈胤法親王		『続史愚抄』
91	明暦2年9月19・20日	後西天皇	泉涌寺	○	梵唄講誦、曼荼羅供	元昌西堂、明岳長老		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
92	万治3年8月20日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	曼陀羅供	照高院宮道晃法親王		『忠利宿物語』
93	万治3年9月18～22日	後西天皇	禁裏御所 (後西) 清涼殿	○	法華八講	妙法院宮堯恕法親王、聖護院宮道寛法親王、一乗院宮真教法親王以下延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺衆僧		『忠利宿物語』
94	万治3年9月18日	後水尾上皇	般舟院	○	一	一		『宮内卿記』
95	万治3年9月19・20日	後西天皇	泉涌寺	○	梵網經講、曼荼羅供	天台西堂、明岳長老		『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』
96	寛文6年8月19・20日	後西上皇	般舟院	○	例時、四箇法要	東空長老、隱空長老		『緯史愚抄』
97	寛文6年9月3日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	観音護法	春莊全長老ほか相国寺衆11名	後西上皇が御幸・聴聞	『南史記』
98	寛文6年9月19・20日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	羅供	曼殊院宮良尚法親王		『緯史愚抄』
99	寛文6年9月20日	寛元天皇	般舟院	○	一	一		『緯史愚抄』
100	寛文6年9月20日	泉涌寺	泉涌寺	○	曼荼羅供	一		『緯史愚抄』
101	寛文10年8月20日	後水尾上皇	般舟院	○	法華經講	一		『師庸朝臣記』
102	寛文10年9月19・20日	後水尾上皇	仙洞御所 (後水尾)	○	観法講	樺井宮盛胤法親王		『寛恕法親王日記』
103	寛文10年9月19・20日	寛元天皇	般舟院	○	一、聲明懺法	一、二尊院		『緯史愚抄』
104	寛文10年9月19・20日	寛元天皇	泉涌寺	○	一、聲明懺法	一、一		『緯史愚抄』
105	延宝6年9月20日	般舟院	般舟院	○	一	一		『基量御記』
106	延宝6年9月20日	泉涌寺	泉涌寺	○	土砂加持	一		『基量御記』
107	貞享元年9月	寛元天皇	般舟院	○	一	一		『緯史愚抄』
108	貞享2年9月	寛元天皇	般舟院	○	一	一		『緯史愚抄』
109	貞享3年9月18～22日	寛元天皇	禁裏御所 (寛元) 清涼殿	○	法華八講	一乗院宮真教法親王、興相院宮道祐法親王、毘沙門堂宮天真法親王以下延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺衆僧	准認筆法華八講	『永貞御記』
110	三十三年回忌	寛元天皇	般舟院	○	法華經法、胎曼荼羅供	一		『緯史愚抄』
111	貞享3年9月19～20日	寛元天皇	泉涌寺	○	懺法	一		『緯史愚抄』
112	三十四回忌	貞享4年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
113	三十九回忌	元禄5年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
114	四十回忌	元禄6年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
115	四十一回忌	元禄7年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
116	四十三回忌	元禄9年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
117	四十四回忌	元禄10年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
118	四十五回忌	元禄11年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
119	四十七回忌	元禄13年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
120	元禄16年9月14日	孝子内親王	泉涌寺	一	一	一		『緯史愚抄』
121	五十回忌	元禄16年9月16～20日	寛元上皇	○	懺法講	樺井宮道仁法親王		『院中番衆所日記』
122	元禄16年9月19・20日	東山天皇	仙洞御所 (寛元) 小御所	○	例時、行道懺法	通迎院、麗山寺		『緯史愚抄』
123	一	寛元上皇	泉涌寺	○	一	一		『緯史愚抄』
124	五十一回忌	宝永元年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
125	五十二回忌	宝永2年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
126	五十五回忌	宝永5年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
127	五十六回忌	宝永6年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
128	五十七回忌	宝永7年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
129	五十八回忌	正徳元年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
130	五十九回忌	正徳2年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
131	六十回忌	正徳3年9月	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
132 六十一回忌	正徳4年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
133 六十二回忌	正徳5年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
134 六十三回忌	享保2年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
135 六十四回忌	享保3年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
136 六十六回忌	享保5年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
137 六十七回忌	享保6年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
138 六十八回忌	享保7年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
139 六十九回忌	享保8年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
140 七十回忌	享保9年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
141 七十一回忌	享保10年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
142 七十二回忌	享保11年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
143 七十三回忌	享保12年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
144 七十四回忌	享保13年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
145 七十五回忌	享保14年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
146 七十六回忌	享保15年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
147 七十七回忌	享保16年9月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
148 百回忌	宝暦3年9月19～20日	桃園天皇	般舟院	○	粥陀三昧、法華三昧	一、遣迎院	—	『頼言卿記』『靈墓記』
149 百回忌		桃園天皇	泉涌寺	○	授綱講讃、法華懺法	一、照峯長老	—	『頼言卿記』『靈墓記』
150 百五十回忌	享和3年9月20日	光格天皇	般舟院	—	—	一、遣迎院	—	『公明記』
151 百回忌	嘉永6年9月19日	孝明天皇	般舟院	—	阿弥陀三昧	般舟院	—	『橋本実久日記』
152 百回忌		孝明天皇	泉涌寺	—	授綱講讃	智鏡長老	—	『橋本実久日記』
153 百回忌	嘉永6年9月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	授綱講讃	智鏡長老	—	『橋本実久日記』

④後水尾天皇 延宝8年8月19日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
154 一週忌	延宝9年8月15日	明正上皇	仙阿御所(明正)カ	—	観音懺法	大聖寺宮永亨女王	—	『无上法院観御日記』
155 一週忌	延宝9年8月19日	靈元天皇	般舟院	○	聲明懺法	遣迎院	所司代戸田越前守、武家使由良貞禮守などが焼香のために西寺へ参詣	『兼輝公記』
156 三回忌	天和2年8月15日	靈元天皇	泉涌寺	○	法華懺法	—	—	『兼輝公記』
157 三回忌	天和2年8月16日	後西上皇	泉涌寺	○	—	—	—	『基量卿記』
158 三回忌	天和2年8月17～21日	明正上皇	泉涌寺	○	—	—	—	『基量卿記』
159 四回忌	天和3年8月19日	靈元天皇	禁裏御所(靈元)清涼殿	○	懺法講	毘沙門堂宮公辨法親王	—	『兼輝公記』
160 四回忌	天和3年8月19日	靈元天皇	般舟院	○	御経供養	慶算前大僧正	—	『兼輝公記』
161 五回忌	貞享元年8月19日	靈元天皇	般舟院	○	御経供養	慶算前大僧正	—	『兼輝公記』
162 七回忌	貞享3年8月16・17日	明正上皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	—	—	『兼輝公記』
163 七回忌	貞享3年8月17日～21日	靈元天皇	禁裏御所(靈元)清涼殿	○	法華講讃、如法念仏	梶井宮慈胤法親王	梶井宮は途中で退出、持明院大僧都盛観が代わりに導師を務める	『基量卿記』『孝恕法親王日記』
164 七回忌	貞享3年8月18・19日	靈元天皇	般舟院	○	法華講讃、如法念仏	—	—	『兼輝公記』
165 八回忌	貞享4年8月	靈元天皇	泉涌寺	○	経供養、理趣三昧	—	—	『兼輝公記』
166 八回忌	貞享4年8月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』
167 十一回忌	元禄3年8月19日	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記抜書』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
168	元禄5年8月16・17日	明正上皇	泉涌寺	○	光明真言、御経 供養	孤雲長老、圓岩長老		『純史愚抄』
169	元禄5年8月18・19日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）御会間	○	御経供養	天台座主妙法院宮亮延法親王		『院中番衆所日記』
170	元禄5年8月18・19日	東山天皇	般舟院	○	—	—		『基熙公記』
171	元禄5年8月18・19日	東山天皇	泉涌寺	○	早饗法	—		『基熙公記』
172	元禄9年8月16・17日	明正上皇	泉涌寺	○	光明三昧、経供 養	卓岩長老、湛恵長老		『純史愚抄』
173	元禄9年8月18・19日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）御会間	○	饗法講	常修院宮慈胤法親王	所労のため常修院宮は動仕せず	『院中番衆所日記』
174	元禄9年8月18・19日	東山天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	—		『資藤日記』
175	—	東山天皇	般舟院	○	—	—		『兼輝公記』
176	宝永元年8月16・17日	東山天皇	般舟院	○	法華講讀、行道 懺法	遍迎院、巖山寺		『純史愚抄』
177	二十五回忌	—	—	○	光明三昧、法華 懺法	春瑞長老、警事長老		『純史愚抄』
178	—	靈元上皇	般舟院	○	—	—		『院中番衆所日記』
179	宝永元年8月18・19日	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—		『院中番衆所日記』
180	正徳2年8月17～19日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）弘御所	○	饗法講	天台座主梶井宮道仁法親王		『院中番衆所日記』
181	—	中御門天皇	般舟院	○	光明供、法華三 昧	般舟院、巖山寺		『兼香公記』
182	正徳2年8月18・19日	中御門天皇	泉涌寺	○	梵鐘講讀、理趣 三昧	宇宕長老、虎溪長老		『兼香公記』
183	享保14年8月17～19日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）小御所	○	法華懺法	妙法院宮義恭法親王	凶事のため饗法講を停止	『通兄公記』
184	五十回忌	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御湯殿上日記』
185	享保14年8月18・19日	中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御湯殿上日記』
186	—	後桃園天皇	般舟院	○	—	—		『御湯殿上日記』
187	安永8年8月18・19日	後桃園天皇	泉涌寺	○	—	—		『御湯殿上日記』
188	—	仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
189	文政12年8月19日	仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—		『橋本実久日記』

⑤後西天皇 貞享2年2月22日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
190	—	—	—	○	法華懺法	—		『兼輝公記』
191	貞享3年2月21・22日	靈元天皇	泉涌寺	○	理趣三昧	—		『兼輝公記』
192	—	靈元天皇	般舟院	○	—	—		『基熙公記』
193	貞享4年2月21・22日	靈元天皇	泉涌寺	○	—	—		『基熙公記』
194	—	東山天皇	般舟院	○	—	—		『兼輝公記』
195	元禄4年2月21・22日	東山天皇	泉涌寺	○	—	—		『兼輝公記』
196	七回忌	—	—	○	饗法講	常修院宮慈胤法親王	持明院権僧正盛親が名代として導師 を勤める	『基熙公記』
197	元禄4年2月22日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）御会間	○	饗法講	—		『院中番衆所日記』
198	元禄10年2月21・22日	東山天皇	般舟院	○	如法念仏	巖山寺		『百々録』
199	十三回忌	—	—	○	—	—	女御入内のため仙洞御所での仏事は 停止	『基熙公記』
199	元禄10年2月22日	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—		『院中番衆所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
200	元禄14年2月19・20日	靈元上皇	般舟院	○	—	—		『基長御記』
201	—	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—		『基長御記』
202	—	東山天皇	般舟院	○	—	—		『基熙公記』
十七回忌	元禄14年2月21・22日	東山天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	—		『百々録』
203	—	—	—	—	—	—		—
204	宝永6年2月19・20日	靈元上皇	般舟院	○	光明三昧	—		『院中番衆所日記』
205	—	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—		『日野輝光御記』
206	—	東山天皇	般舟院	○	一、法華懺法	一、蘆山寺		『日野輝光御記』
207	宝永6年2月21・22日	東山天皇	泉涌寺	○	—	—		『尊弘御記』
208	—	—	—	—	—	—		—
209	享保2年2月19・20日	靈元上皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵網 諸讃	照山長老、卓岩長老		『院中番衆所日記』
210	—	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『禁裏番衆所日記』
211	享保2年2月21・22日	中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『禁裏番衆所日記』
212	—	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『般舟三昧院御用日次披露書』
213	享保3年2月	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
214	—	中御門天皇	泉涌寺	○	一、如法念仏	—		『御邊殿上日記』
215	—	光格天皇	般舟院	○	懺法	一、月殿長老		『禁裏執次詰所日記』
216	天明4年2月21・22日	光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 念仏	一、月殿長老		『禁裏執次詰所日記』
217	百五十回忌	天保5年2月21・22日	仁孝天皇	○	理趣三昧、法華 懺法	般舟院、蘆山寺		『禁裏執次詰所日記』
218	元禄9年11月10日死去	仁孝天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	明鈺長老、采海長老		『禁裏執次詰所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
218	元禄10年11月7・8日	靈元上皇	泉涌寺	○	一、梵網諸讃	—		『院中番衆所日記』
219	—	東山天皇	般舟院	○	早懺法、曼陀羅 供	—	高家織田能登守が焼香のため両寺に 参詣	『寶暦日記』『基熙公記』
220	元禄10年11月9・10日	東山天皇	泉涌寺	○	—	—		『寶暦日記』
221	—	—	—	—	—	—	所為のため常修院宮は動仕せず、持 明院大僧正盛観が名代として導師を 勤める	『仙洞女房日記』『兼輔公記』
222	元禄11年11月9・10日	靈元上皇	仙洞御所(靈元)小御所	○	懺法講	常修院宮慈胤法親王		『兼輔公記』
223	—	東山天皇	般舟院	○	如法念仏、四箇 法要	般舟院、蘆山寺		『兼輔公記』『寶暦日記』
224	元禄11年11月9・10日	東山天皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	湛恵長老、卓岩長老		『兼輔公記』『寶暦日記』
225	—	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—		『院中番衆所日記』
226	元禄15年11月9・10日	東山天皇	般舟院	○	光明供、聲明懺 法	二尊院、蘆山寺	「如後西院七回聖忌御沙汰被仰出 云々」	『緯史愚抄』
227	—	東山天皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	暨峯長老、卓岩長老		『緯史愚抄』
228	—	東山天皇	般舟院	○	—	—		『般舟三昧院御用日次披露書』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
228	宝永5年11月7・8日	靈元上皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵網 讃謄	—		『院中番衆所日記』
229	十三回忌	東山天皇	般舟院	○	例時、法華三昧 理趣三昧、法華 懺法	蓮迎院、巖山寺 卓岩長老、貫道長老		『院中番衆所日記』 『純史愚抄』
230	宝永5年11月9・10日	東山天皇	泉涌寺	○	懺法			
231	正徳2年11月7・8日	靈元上皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵網 讃謄	—		『院中番衆所日記』
232	十七回忌	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『基源公記』
233	正徳2年11月9・10日	中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『基源公記』
234	享保5年10月9日	靈元上皇	泉涌寺	○	○ 法華懺法	照山長老		『院中番衆所日記』
235	二十五回忌	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『基長卿記』
236	享保5年10月10日	中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『基長卿記』
237	二十六回忌	享保6年11月	中御門天皇 ^カ 般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日記抜書』
238	享保13年11月9日	靈元上皇	泉涌寺	○	○ 法華懺法	大収長老		『院中番衆所日記』
239	三十三回忌	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御湯殿上日記』『基長卿記』
240	享保13年11月10日	中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御湯殿上日記』『基長卿記』
241	五十回忌	桜門天皇	般舟院	○	○ 光明真言、如法 念仏	蓮迎院、二尊院		『相所卿記』
242	延享2年10月9・10日	桜門天皇	泉涌寺	○	○ 光明真言、如法 念仏	—		『純史愚抄』
243	百回忌	寛政7年10月10日	般舟院	○	○ 聲明例時	般舟院	盛化門院十三回忌懺法講の初日に平 行開催	『築真執次語所日記』
244	光格天皇	泉涌寺		○	理趣三昧	月詠長老		『築真執次語所日記』
245	弘化2年10月9・10日	仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
246	百五十回忌	仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—		『橋本実久日記』

⑦東山天皇 宝永6年12月17日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
247	宝永7年12月14・15日	靈元上皇	泉涌寺	○	一、経供養	—		『院中番衆所日記』
248	宝永7年12月15日	承秋門院	泉涌寺	○	○ 光明三昧	貫道長老		『日野輝光卿記』
249	一周忌	中御門天皇	般舟院	○	一、曼陀羅供 懺法	蓮迎院、巖山寺	上使前田隠岐守が焼香のため両寺へ 参詣	『日野輝光卿記』『基長卿記』
250	宝永7年12月16・17日	中御門天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法花 懺法	整峯長老、卓岸長老		『日野輝光卿記』
251	正徳元年12月14・15日	靈元上皇	泉涌寺	○	土砂加持、経供 養	貫道長老、香瑞長老		『日野輝光卿記』
252	正徳元年12月15日	承秋門院	泉涌寺	○	○ 光明三昧	卓岩長老		『日野輝光卿記』
253	三回忌	中御門天皇	般舟院	○	法華懺法、塔供 養	應空長老、如空長老		『日野輝光卿記』
254	正徳元年12月16・17日	中御門天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	虎溪長老、卓岩長老		『日野輝光卿記』
255	四回忌	中御門天皇	般舟院	○	華嚴長老			『築真番衆所日記』
256	五回忌	正徳3年12月17日	中御門天皇	○	御経供養	常住金剛院前大僧正顯忍		『築真番衆所日記』
257	六回忌	正徳4年12月17日	中御門天皇	○	御経供養	僧正純緒		『築真番衆所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 舊座	内 容	導 師	備 考	典 拠
258 八回忌	正徳5年12月14・15日	靈元上皇	泉涌寺	○	土砂加持、経供養	照山長老、貫道長老		『日野輝光御記』
259 七回忌	正徳5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	羅供	般舟院、巖山寺		『日野輝光御記』
260 八回忌	享保元年12月17日	中御門天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	卓岩長老、虎溪長老		『日野輝光御記』
261 九回忌	享保2年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院前大僧正圓恵		『日野輝光御記』
262 十回忌	享保3年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	—		『日野輝光御記』
263 十二回忌	享保5年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	日藏院前大僧正		『禁裏番衆所日記』
264 十三回忌	享保6年12月14・15日	靈元上皇	泉涌寺	○	土砂加持、経供養	松長長老、虎長老		『禁裏御記』
265 十三回忌	享保6年12月13～17日	中御門天皇	禁裏御所(中御門) 清凉殿	○	懺法講	天台座主梶井宮道仁法親王		『基長御記』
266 十四回忌	享保7年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
267 十五回忌	享保8年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	—		『御邊殿上日記』
268 十六回忌	享保9年12月	中御門天皇	般舟院	—	御経供養	—		『秘史愚抄』
269 十七回忌	享保10年12月14・15日	靈元上皇	泉涌寺	○	土砂加持、経供養	大収長老、照山長老		『基長御記』
270 十八回忌	享保10年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
271 十九回忌	享保11年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	—		『御邊殿上日記』
272 二十回忌	享保12年12月	中御門天皇	般舟院	—	—	—		『秘史愚抄』
273 二十一回忌	享保13年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	日藏院前大僧正		『秘史愚抄』
274 二十二回忌	享保14年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	—		『日野西實教日記』
275 二十三回忌	享保15年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	—		『秘史愚抄』
276 二十四回忌	享保16年12月17日	中御門天皇	禁裏御所(中御門) 清凉殿	○	法華八講	日藏院前大僧正		『光御御記』
277 二十五回忌	享保18年12月13～17日	中御門天皇	—	○	—	一乗院宮尊昭親王、天台座主青蓮院宮尊祐親王以下延暦寺・園城寺・東大寺・興福寺衆僧	宸筆法華八講	『東山院廿五回聖忌宸筆八講行香之御願東江中遺留』
278 二十六回忌	享保18年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『兼香公記』
279 二十七回忌	享保19年12月17日	中御門天皇	般舟院	○	御経供養	日藏院前大僧正		『兼香公記』
280 二十八回忌	元文元年12月17日	中御門上皇	般舟院	○	法花三昧	二尊院		『秘房御記』
281 二十九回忌	元文4年12月	中御門上皇	般舟院	—	—	—		『秘房御記』
282 三十回忌	寛保元年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	四箇法要、曼荼羅供	遣迎院、二尊院		『秘房御記』
283 三十三回忌	寛保元年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『秘房御記』
284 五十回忌	宝暦8年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	如法念仏、法花三昧	二尊院、遣迎院		『秘房御記』
285 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
286 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
287 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
288 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
289 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
290 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
291 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』
292 百回忌	文化5年12月16・17日	中御門天皇	般舟院	○	土砂加持	潜海長老		『仙洞女房日記』

⑧ 聖元天皇 享保17年8月6日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
293 一周忌	享保18年8月5・6日	中御門天皇	般舟院	○	—	—	上使として長澤下野守が参内、清涼殿にて中御門天皇に拜謁	『御湯殿上日記』
294		中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御湯殿上日記』
295 三回忌	享保19年8月5・6日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御湯殿上日記』
296		中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御湯殿上日記』
297 四回忌	享保20年8月	中御門天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次披露』
298 七回忌	元文3年8月5・6日	桜田天皇	般舟院	○	法華三昧、如法念仏	遣迎院、二尊院		『箱笥御記』
299		桜田天皇	泉涌寺	○	—	—		『箱言御記』
300 十三回忌	延享元年8月5・6日	桜田天皇	般舟院	○	弥陀三昧、曼陀羅供	遣迎院、二尊院		『箱笥御記』
301		桜田天皇	泉涌寺	○	—	—		『通兄公記』
302		桜田上皇	仙阿御所(桜町)小御所	○	法華懺法	天台座主妙法院宮藏持法親王		『八槻御記』『歴史愚抄』
303 十七回忌	寛延元年8月5・6日	桃園天皇	般舟院	○	弥陀三昧、四箇法要	般舟院、遣迎院		『箱笥御記』
304		桃園天皇	泉涌寺	○	—	—		『箱言御記』
305		桃園天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	般舟院、遣迎院		『箱笥御記』
306 二十五回忌	宝暦6年8月5・6日	桃園天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、一	照峯長老、一		『八槻御記』
307		後桜田天皇	般舟院	○	法花三昧、四箇法要	二尊院、般舟院		『御原紀光日記』
308 三十三回忌	明和元年8月5・6日	後桜田天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法花懺法	舜峯長老、月耕長老		『御原紀光日記』
309		天明元年8月5日	般舟院	○	如法念仏	廬山寺		『御原紀光日記』
310		天明元年8月6日	後桜田上皇	○	法花懺法	月晩長老		『御原紀光日記』
311 五十回忌		光格天皇	般舟院	○	法花三昧、四箇法要	般舟院、廬山寺		『御原紀光日記』
312		天明元年8月5・6日	光格天皇	○	理趣三昧、法花懺法	大定長老、月晩長老		『御原紀光日記』
313			光格上皇	○	—	—		『日次集』
314		天保2年8月5・6日	般舟院	○	—	—		『橋本更久日記』
315 百回忌		仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	遣迎院、廬山寺	東山上皇御塔修復につき同法事分平行開催	『猿蓑執次詰所日記』
316		天保2年8月5・6日	仁孝天皇	○	理趣三昧、法華懺法	泉涌長老、明舒長老		『猿蓑執次詰所日記』

⑨ 中御門天皇 元文2年4月11日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
317 一周忌	元文3年4月10・11日	桜田天皇	般舟院	○	如法念仏、曼陀羅供	遣迎院、二尊院		『八槻御記』
318		桜田天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	泰嶽長老、盤溪長老		『歴史愚抄』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
319	元文4年4月7～11日	桜町天皇	禁裏御所(桜町) 清涼殿	○	懺法講	樺井宮教仁入道親王	樺井宮は幼少のため、佛眼院僧正が導師を務める	『八幡御記』『箱房御記』
320	三回忌	桜町天皇	般舟院	○	弥陀三昧、四箇 法要	—		『通兄公記』
321	元文4年4月10・11日	桜町天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	—		『通兄公記』
322	四回忌	元文5年4月10・11日	桜町天皇	○	例時、法花三昧 御経供養	遣迎院、二尊院 上乗院大僧都祐辨		『箱房御記』
323	五回忌	寛保元年4月10・11日	桜町天皇	○	一、法花三昧 御経供養	遣迎院、二尊院 常住金剛院権僧正寛恕		『箱房御記』
324	六回忌	寛保2年4月10・11日	桜町天皇	○	例時、法花三昧 御経供養	般舟院、二尊院 常住金剛院権僧正寛恕		『箱房御記』
325	寛保3年4月7～11日	桜町天皇	禁裏御所(桜町) 清涼殿	○	懺法講	樺井宮教仁入道親王		『八幡御記』
326	七回忌	寛保3年4月10・11日	桜町天皇	○	如法念仏、曼陀 羅供	遣迎院、二尊院		『箱房御記』
327	八回忌	延享元年4月10・11日	桜町天皇	○	理趣三昧、—	—		『通兄公記』
328	九回忌	延享2年4月10・11日	桜町天皇	○	例時、法華懺法	遣迎院、二尊院 常住金剛院権僧正寛恕		『箱房御記』
329	十回忌	延享3年4月10・11日	桜町天皇	○	例時、法花三昧	遣迎院、二尊院 常住金剛院権僧正寛恕		『箱房御記』
330	十一回忌	延享4年4月10・11日	桜町天皇	○	御経供養	—		『箱房御記』
331	十二回忌	延享5年4月	桜町天皇	○	御経供養	上乗院権僧正祐辨		『箱房御記』
332	十三回忌	寛延2年3月10・11日	桃園天皇	○	如法念仏、四箇 法要	般舟院、遣迎院		『箱房御記』
333	寛延2年4月10・11日	桜町天皇	般舟院	○	法華懺法	一、磐溪長老		『緯史愚抄』
334	寛延2年3月10・11日	桃園天皇	泉涌寺	○	法華懺法	天台座主輪王寺宮公達法親王	般舟院に宸筆御経を奉納	『通兄公記』
335	寛延2年4月10・11日	桜町天皇	仙洞御所(桜町) 小御所	○	一、理趣三昧 法要	—		『緯史愚抄』
336	十七回忌	宝暦3年3月10・11日	桃園天皇	○	弥陀三昧、四箇 法要	嵐山寺、般舟院		『箱房御記』
337	二十五回忌	宝暦11年3月10・11日	桃園天皇	○	三昧	—		『箱房御記』
338	三十三回忌	明和6年4月10・11日	後桜町天皇	○	聲明例時、四箇 法要	二尊院、般舟院		『御原紀光日記』
339	三十三回忌	明和6年4月10・11日	後桜町天皇	○	理趣三昧、法花 懺法	舜峯長老、高岳長老		『御原紀光日記』
340	五十回忌	天明6年3月10・11日	光格天皇	○	法華三昧、如法 念仏	一、般舟院		『山科忠言御記』『経歴公記』
341	天明6年4月11日	後桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		『山科忠言御記』
342	天明6年4月11日	後桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		『院中評定日記案』
343	天明6年4月11日	後桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		『院中執次詰所日記』
344	天明6年4月11日	後桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		
345	天明6年4月11日	後桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		

⑩桜町天皇 寛延3年4月23日死去

形式(回忌)	年月日	主催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
346	寛延 4年 4月 22・23 日 一周忌	桃園天皇	般舟院	○	如法念仏、四箇 法要	般舟院、遣迎院	上使として前田出羽守房長が参内、 清涼殿にて桃園天皇に拜謁	『八槻御記』
347		桃園天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法花 懺法	磐溪長老、文庫長老		『八槻御記』
348		寛延 4年 4月 21 日	般舟院	×	—	—		『知音宿禰記』
349		青崎門院	泉涌寺	×	—	—		『知音宿禰記』
350	宝暦 2年 4月 19 日 宝暦 2年 4月 21～23 日 三回忌	青崎門院	泉涌寺	×	—	—	青蓮院宮尊英入道親王	『御湯殿上日記』
351		桃園天皇	禁裏御所 (桃園)	○	懺法講	—		『八槻御記』
352		桃園天皇	般舟院	○	聲明例時、曼陀 懺供	般舟院、遣迎院		『秘房御記』
353		桃園天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法花 懺法	盤溪長老、月耕長老		『純史愚抄』
354	宝暦 3年 4月 23 日 四回忌	桃園天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	遣迎院	秘井宮は幼少のため、導師を勤めず	『秘房御記』
355		桃園天皇	般舟院	○	例時 御経供養	尊勝院僧正		『秘房御記』
356		宝暦 5年 4月 22・23 日 六回忌	般舟院	○	一、法花三昧 御経供養	般舟院、遣迎院		『秘房御記』
357		宝暦 6年 4月 19～23 日 七回忌	桃園天皇	○	懺法講	秘井宮常仁入道親王		『八槻御記』
358	宝暦 6年 4月 20 日 宝暦 6年 4月 22・23 日 八回忌	青崎門院	泉涌寺	×	—	般舟院、—	秘井宮は幼少のため、導師を勤めず	『御湯殿上日記』
359		桃園天皇	般舟院	○	—	—		『秘房御記』
360		桃園天皇	泉涌寺	○	—	—		『御湯殿上日記』
361		桃園天皇	般舟院	○	例時、法花三昧 御経供養	常住金剛院僧正寛恕		『秘房御記』
362	宝暦 8年 4月 23 日 九回忌	桃園天皇	般舟院	○	法花三昧 御経供養	—	秘井宮常仁入道親王	『秘房御記』
363		桃園天皇	般舟院	○	一、法華三昧 御経供養	尊勝院僧正		『秘房御記』
364		宝暦 10年 4月 23 日 十一回忌	般舟院	○	法花三昧 御経供養	般舟院、遣迎院		『秘房御記』
365		宝暦 11年 4月 23 日 十二回忌	桃園天皇	○	法花三昧 御経供養	常住金剛院僧正寛恕		『秘房御記』
366	宝暦 12年 4月 19 日～23 日 十三回忌	桃園天皇	禁裏御所 (桃園)	○	御経供養	常住金剛院僧正寛恕	秘井宮常仁入道親王	『御原紀光日記』
367		桃園天皇	般舟院	○	懺法講	秘井宮常仁入道親王		『八槻御記』
368		桃園天皇	泉涌寺	○	懺法 懺法	二尊院、般舟院		『御原紀光日記』
369		宝暦 13年 4月 23 日 十四回忌	後桜町天皇	○	理趣三昧、法花 懺法	月耕長老、照峯長老		『御原紀光日記』
370	宝暦 14年 4月 23 日 宝暦 14年 4月 23 日 十六回忌	後桜町天皇	般舟院	○	御経供養	弘地院僧正常秀	秘井宮常仁入道親王	『類言御記』
371		明和 2年 4月 23 日	般舟院	○	御経供養	常住金剛院僧正寛恕		『類言御記』
372		明和 3年 4月 19～23 日	禁裏御所 (後桜町)	○	懺法講	秘井宮常仁入道親王		『御湯殿上日記』
373		明和 3年 4月 19 日	赤礼門院	×	—	—		『御湯殿上日記』
374	明和 3年 4月 22・23 日 十七回忌	後桜町天皇	般舟院	○	弥陀三昧、法花 三昧	二尊院、般舟院	秘井宮常仁入道親王	『御原紀光日記』
375		後桜町天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法花 三昧	秘井宮常仁入道親王		『御原紀光日記』
376		明和 4年 4月 23 日 十八回忌	後桜町天皇	○	御経供養	常住金剛院僧正寛恕		『御原紀光日記』
377		明和 5年 4月 23 日 十九回忌	後桜町天皇	○	御経供養	弘地院僧正常秀		『御原紀光日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
378 二十回忌	明治6年4月23日	後醍醐天皇	般舟院		御経供養	常住金剛院前大僧正寛徳		『御原紀光日記』
379 二十一回忌	明治7年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	○	御経供養	仏地院権僧正常秀		『八槻御記』
380 二十二回忌	明治8年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『公明記』
381 二十三回忌	明治9年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『八槻御記』
382 二十五回忌	安永3年4月21～23日	後醍醐天皇	仙洞御所(後醍醐) 小御所	○	御経供養	青蓮院宮尊真人道親王		『八槻御記』
383 25回忌	安永3年4月22日	後醍醐天皇	般舟院	○	御経三昧	藤山寺		『御原紀光日記』
384 26回忌	安永4年4月	後醍醐天皇	泉涌寺	○	理趣三昧	天隨長老		『禁裏執次諸所日記』
385 二十六回忌	安永4年4月	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次拔書』
386 二十七回忌	安永5年4月	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次拔書』
387 二十八回忌	安永6年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『野宮定晴日記』
388 二十九回忌	安永7年4月	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次拔書』
389 三十回忌	安永8年4月	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次拔書』
390 三十一回忌	安永9年4月	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次拔書』
391 三十二回忌	天明元年4月	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次拔書』
392 32回忌	天明2年4月20日	青綺門院	泉涌寺	—	—	—		『仙洞女房日記』
393 33回忌	天明2年4月21・22日	後醍醐天皇	泉涌寺	—	—	—		『御内々御法事』
394 三十三回忌	天明2年4月21～23日	後醍醐天皇	般舟院	○	—	般舟院		『御良公記』
395 三十四回忌	天明3年4月23日	後醍醐天皇	仙洞御所(後醍醐) 小御所	○	法華懺法	天台座主青蓮院宮尊真人道親王		『院中評定日次案』
396 三十五回忌	天明4年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『院中評定日次案』
397 三十六回忌	天明5年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『院中評定日次案』
398 三十七回忌	天明6年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『院中評定日次案』
399 三十八回忌	天明7年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『院中評定日次案』
400 三十九回忌	天明8年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『院中評定日次案』
401 四十回忌	天明9年4月22日	後醍醐天皇	般舟院	—	—	—		『院中評定日次案』
402 四十一回忌	寛政2年4月22日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
403 四十二回忌	寛政3年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
404 四十三回忌	寛政4年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
405 四十四回忌	寛政5年4月22日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
406 四十五回忌	寛政6年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
407 四十六回忌	寛政7年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
408 四十七回忌	寛政8年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
409 四十八回忌	寛政9年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
410 四十九回忌	寛政10年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
411 五十回忌	寛政11年4月17日	後醍醐天皇	般舟院	○	如法念仏	不寝院		『院中執次諸所日記』
412 50回忌	寛政11年4月18日	後醍醐天皇	泉涌寺	○	土砂加持	泰岸長老		『院中執次諸所日記』
413 50回忌	寛政11年4月22・23日	後醍醐天皇	仙洞御所(後醍醐) 弘御所	○	法華懺法 曼荼羅供	天台座主青蓮院宮尊真人道親王		『仙洞女房日記』
414 50回忌	寛政11年4月22・23日	光格天皇	般舟院	○	理趣三昧、法華 懺法	二尊院、追遠院		『禁裏執次諸所日記』
415 51回忌	寛政12年4月23日	光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	月殿長老、泰岸長老		『禁裏執次諸所日記』
416 51回忌	享和元年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	二尊院		『院中執次諸所日記』
417 52回忌	享和2年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	藤山寺		『院中執次諸所日記』
418 53回忌	享和3年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	藤山寺		『院中執次諸所日記』
419 54回忌	享和3年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	藤山寺		『院中執次諸所日記』
420 54回忌	享和3年4月23日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	藤山寺		『院中執次諸所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
421 五十五回忌	享和4年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	廬山寺		『酒中執次諸所日記』
422 五十六回忌	文化2年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	廬山寺		『酒中執次諸所日記』
423 五十七回忌	文化3年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	廬山寺		『酒中執次諸所日記』
424 五十八回忌	文化4年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	廬山寺		『酒中執次諸所日記』
425 五十九回忌	文化5年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	廬山寺		『酒中執次諸所日記』
426 六十回忌	文化6年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	廬山寺		『酒中執次諸所日記』
427 六十一回忌	文化7年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『酒中執次諸所日記』
428 六十二回忌	文化8年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『酒中執次諸所日記』
429 六十三回忌	文化9年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『酒中執次諸所日記』
430 六十四回忌	文化10年4月23日	後桜町上皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『酒中執次諸所日記』
431 百回忌	嘉永2年4月22・23日	李明天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	誓願長老、泉海長老		『博房御記』
432				○	理趣三昧、法華懺法			『日並記』

①桃圖天皇 宝暦12年7月12日死去、忌日は7月21日

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
433 一周忌	宝暦13年7月20・21日	後桜町天皇	般舟院	○	法華三昧、四箇法要	一、本宮長老	上使として前田侍從房長が両寺に参詣し進物を献上	『八槻御記』
434		後桜町天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	月耕長老、高岳長老		『八槻御記』
435	明和元年7月17～21日	後桜町天皇	禁裏御所(後桜町) 清涼殿	○	懺法講	梶井宮常仁入道親王		『八槻御記』
436 三回忌	明和元年7月20・21日	後桜町天皇	般舟院	○	念仏	二尊院、般舟院		『御原紀光日記』
437		後桜町天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	月耕長老、高岳長老		『御原紀光日記』
438 四回忌	明和2年7月21日	後桜町天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院僧正寛愍		『御原紀光日記』
439 五回忌	明和3年7月21日	後桜町天皇	般舟院	○	御経供養	御地院権僧正常秀		『御原紀光日記』
440 六回忌	明和4年7月21日	後桜町天皇	般舟院	○	御経供養	御地院権僧正常秀		『御原紀光日記』
441	明和5年7月17～21日	後桜町天皇	禁裏御所(後桜町) 清涼殿	○	懺法講	梶井宮常仁入道親王		『八槻御記』
442 七回忌	明和5年7月20・21日	後桜町天皇	般舟院	○	念仏三昧、法花三昧	廬山寺、般舟院		『御原紀光日記』
443		後桜町天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法花三昧	舜峯長老、天瑞長老		『御原紀光日記』
444 八回忌	明和6年7月21日	後桜町天皇	般舟院	○	御経供養	御地院僧正常秀		『八槻御記』
445 九回忌	明和7年7月21日	後桜町天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院前大僧正寛愍		『八槻御記』
446 十回忌	明和8年7月21日	後桃圖天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院前大僧正寛愍	『摂政殿被仰』	『八槻御記』
447 十一回忌	明和9年7月21日	後桃圖天皇	般舟院	○	御経供養	御地院僧正常秀	『摂政殿被仰』	『八槻御記』
448 十二回忌	安永2年7月21日	後桃圖天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院前大僧正寛愍		『八槻御記』
449		後桃圖天皇	禁裏御所(後桃圖) 清涼殿	○	懺法講	持明院僧正良胤はか梁僧12名	権井門跡に入室予定の寛宮が未だ入寺待度していないため、持明院僧正良胤が導師を務めた	『八槻御記』『野宮定晴日記』
450 十三回忌	安永3年7月18・19日	後桜町上皇	泉涌寺	○	一、法華三昧	一、二尊院		『御原紀光日記』
451		後桃圖天皇	般舟院	○	理趣三昧、法華懺法			『野宮定晴日記』
452	安永3年7月20・21日	後桃圖天皇	泉涌寺	○	懺法	天瑞長老、舜道長老		『野宮定晴日記』
453 十四回忌	安永4年7月21日	後桃圖天皇	般舟院	○	御経供養	親善院権僧正寛興		『御原紀光日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
454 十五回忌	安永5年7月21日	後桃園天皇	般舟院	○	御経供養	持明院僧正正良		『御原紀光日記』
455 十六回忌	安永6年7月21日	後桃園天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院前大僧正寛忠		『御原紀光日記』
456	安永7年7月17～21日	後桃園天皇	持真御所 (後桃園)	○	懺法講	持明院僧正良胤ほか衆僧12名	後桜町上皇、青絳門院、恭礼門院が 聴頭のため御幸	『野宮定晴日記』(後桃園天皇宸 記)
457 十七回忌	安永7年7月18・19日	後桜町上皇	泉涌寺	○	—	—		『院中番衆所日記』
458	安永7年7月20・21日	後桃園天皇	般舟院	○	—	—		『野宮定晴日記』
459	安永7年7月20・21日	後桃園天皇	泉涌寺	○	—	—		『野宮定晴日記』
460 十八回忌	安永8年7月21日	後桃園天皇	般舟院	○	御経供養	僧正焼忠		『御原紀光日記』
461 十九回忌	安永9年7月12日	恭礼門院	般舟院	×	施餓鬼	—		『仙洞女房日記』
462	安永9年7月	安永9年7月	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日記扶書』
463 二十回忌	安永10年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『仙洞女房日記』
464	天明2年7月12日	恭礼門院	般舟院	×	—	—		『仙洞女房日記』
465 二十一回忌	天明2年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『仙洞女房日記』
466 二十二回忌	天明3年7月21日	般舟院	般舟院	—	—	(寺門)		『院中評定日次案』
467 二十三回忌	天明4年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『院中評定日次案』
468 二十四回忌	天明5年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『院中評定日次案』
469	天明6年7月11日	青絳門院	般舟院	×	—	—		『仙洞女房日記』
470 二十五回忌	天明6年7月12日	恭礼門院	般舟院	×	—	—		『仙洞女房日記』
471	天明6年7月19～21日	後桜町上皇	仙洞御所 (後桜町)	○	御経供養	天台座主輪王寺宮公延法親王		『院中評定日次案』
472 二十六回忌	天明7年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『院中評定日次案』
473 二十七回忌	天明8年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『院中評定日次案』
474 二十八回忌	天明9年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中評定日次案』
475 二十九回忌	寛政2年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
476 三十回忌	寛政3年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
477 三十一回忌	寛政4年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
478 三十二回忌	寛政5年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
479	寛政6年7月19～21日	後桜町上皇	仙洞御所 (後桜町)	○	法華懺法	青蓮院宮尊真入道親王		『院中評定日次案』
480 三十三回忌	寛政6年7月20・21日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧、—	—		『御原均光日記』
481	寛政6年7月20・21日	後桜町上皇	泉涌寺	○	理趣三昧、—	—		『御原均光日記』
482	寛政7年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	土砂加持	大澤長老		『院中執次諸所日記』
483 三十四回忌	寛政7年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
484 三十五回忌	寛政8年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
485 三十六回忌	寛政9年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『院中執次諸所日記』
486 三十七回忌	寛政10年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	遣迎院		『院中執次諸所日記』
487 三十八回忌	寛政11年7月12日	光格天皇	泉涌寺	—	大施餓鬼	泰井長老		『禁裏執次諸所日記』
488	寛政11年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	遣迎院		『院中執次諸所日記』
489 三十九回忌	寛政12年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	二尊院		『院中執次諸所日記』
490 四十回忌	享和元年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
491 四十一回忌	享和2年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
492 四十二回忌	文化元年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
493 四十三回忌	文化元年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
494 四十四回忌	文化2年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
495 四十五回忌	文化3年7月12日	光格天皇	泉涌寺	—	大施餓鬼	清海長老		『禁裏執次諸所日記』
496	文化3年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
497 四十六回忌	文化4年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』
498 四十七回忌	文化5年7月21日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『院中執次諸所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
499 四十八回忌	文化6年7月21日	後醍醐天皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『洞中執次詰所日記』
500 四十九回忌	文化7年7月21日	後醍醐天皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『洞中執次詰所日記』
501	文化8年7月11日	後醍醐天皇	般舟院	○	往生講式	般舟院		『洞中執次詰所日記』
502	文化8年7月12日	後醍醐天皇	泉涌寺	○	土砂加持	潜海長老		『洞中執次詰所日記』
503	文化8年7月12日	光格天皇	泉涌寺	×	大施願曳	潜海長老		『洞中執次詰所日記』
504 五十回忌	文化8年7月19～21日	後醍醐天皇	仙洞御所(後醍醐) 小御所	○	懺法講	天台座主梶井宮承真法親王		『日次案』
505	文化8年7月20・21日	光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	二尊院、般舟院		『禁裏執次詰所日記』
506		光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	大圓長老、潜海長老		『禁裏執次詰所日記』
507 五十一回忌	文化9年7月21日	後醍醐天皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『洞中執次詰所日記』
508 五十二回忌	文化10年7月21日	後醍醐天皇	般舟院	一	法華三昧	般舟院		『洞中執次詰所日記』

②後桃園天皇 安永8年10月29日死去、忌日は11月9日

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
509	安永9年10月28・29日	後醍醐天皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵網講讃	大圓長老、大徳長老		『御原紀光日記』
510 一周忌	安永9年11月6・7日	後醍醐天皇	般舟院	○	例味、如法念仏	蓮迎院、般舟院		『御原紀光日記』
511		光格天皇	般舟院	○	法華三昧、四箇法要	蓮迎院、般舟院		『御原紀光日記』
512	安永9年11月8・9日	光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	大定長老、大徳長老		『御原紀光日記』
513	天明元年10月28・29日	後醍醐天皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵網講讃	月晩長老、大定長老		『御原紀光日記』
514	天明元年11月5～9日	光格天皇	禁裏御所(光格) 清涼殿	○	懺法講	天台座主普運院宮尊真入道親王		『御原紀光日記』
515 三回忌	天明元年11月6・7日	後醍醐天皇	般舟院	○	一、法華三昧念仏	般舟院、蘆山寺		『御原紀光日記』
516		光格天皇	般舟院	○	理趣三昧、如法念仏	般舟院、蘆山寺		『禁裏執次詰所日記』
517	天明元年11月8・9日	光格天皇	泉涌寺	○	懺法	大定長老、隠山長老		『禁裏執次詰所日記』
518 四回忌	天明2年11月9日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧	蘆山寺		『禁裏執次詰所日記』
519 五回忌	天明3年11月9日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	持明院前大僧正正良		『禁裏執次詰所日記』
520		光格天皇	泉涌寺	一	施餓鬼	住心院権僧正貴琨		『公明記』
521 六回忌	天明4年11月9日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	一	『内々法事』	『禁裏執次詰所日記』
522	天明5年10月29日	光格天皇	泉涌寺	一	大施願曳	日藏院焼忠僧正		『禁裏執次詰所日記』
523		後醍醐天皇	泉涌寺	○	一	一	『内々法事』	『禁裏執次詰所日記』
524	天明5年11月5～9日	光格天皇	禁裏御所(光格) 清涼殿	○	懺法講	天台座主普運院宮尊真入道親王		『禁裏執次詰所日記』
525 七回忌	天明5年11月7日	後醍醐天皇	般舟院	○	一	一	光格天皇、等の御所作あり	『禁裏執次詰所日記』
526		光格天皇	般舟院	○	理趣三昧、法華懺法	蓮迎院、般舟院		『禁裏執次詰所日記』
527	天明5年11月8・9日	光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	大定長老、一		『禁裏執次詰所日記』
528 八回忌	天明6年11月9日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧	一		『禁裏執次詰所日記』
529 九回忌	天明7年10月9日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	良則前大僧正 良則前大僧正		『山科忠言御記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
530 十回忌	天明 8 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	般舟院 若王子権僧正		「禁裏執次詰所日記」
531		光格天皇	泉涌寺	—	大施餽鬼	彌一長老		「禁裏執次詰所日記」
532 十一回忌	寛政元年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	般舟院 上乗院僧正		「禁裏執次詰所日記」
533		光格天皇	泉涌寺	○	大施餽鬼	僧觀長老		「禁裏執次詰所日記」
534 十二回忌	寛政 2 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	— 實現僧正		「御原均光日記」
535		光格天皇	泉涌寺	—	大施餽鬼	—		「禁裏執次詰所日記」
536	寛政 3 年 10 月 5 ～ 9 日	光格天皇	禁裏御所 (光格) 清涼殿	○	撰法講	持明院前大僧正良胤ほか衆僧 12 名		「禁裏執次詰所日記」
537	寛政 3 年 10 月 6 日	後桜町上皇	泉涌寺	○	撰法講	僧觀長老		「禁裏執次詰所日記」
538 十三回忌	寛政 3 年 10 月 7 日	後桜町上皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	般舟院		「清中執次詰所日記」
539	寛政 3 年 10 月 8 ・ 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧、如法 念仏	—、般舟院		「御良公記」「禁裏執次詰所日記」
540		光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 撰法	月喚長老、僧觀長老		「御良公記」「禁裏執次詰所日記」
541 十五回忌	寛政 5 年 10 月 29 日	光格天皇	般舟院	—	施餽鬼	般舟院	「内々法事」	「禁裏執次詰所日記」
542	寛政 5 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	般舟院 若王子権僧正		「禁裏執次詰所日記」
543 十六回忌	寛政 6 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	—	御経供養	—		「禁裏執次詰所日記」
544	寛政 7 年 10 月 5 ～ 9 日	光格天皇	禁裏御所 (光格) 清涼殿	○	撰法講	持明院前大僧正良胤ほか衆僧 12 名	後桜町上皇が聴聞のため御幸	「禁裏執次詰所日記」
545 十七回忌	寛政 7 年 10 月 6 日	後桜町上皇	泉涌寺	○	撰法講	月喚長老		「禁裏執次詰所日記」
546	寛政 7 年 10 月 7 日	後桜町上皇	般舟院	○	往生講	般舟院		「禁裏執次詰所日記」
547 十八回忌	寛政 8 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	—	御経供養	—		「禁裏執次詰所日記」
548 十九回忌	寛政 9 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	般舟院 常住金剛院僧正		「禁裏執次詰所日記」
549		光格天皇	泉涌寺	—	大施餽鬼	僧觀長老		「禁裏執次詰所日記」
550 二十回忌	寛政 10 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	不淨院 若王子権僧正		「禁裏執次詰所日記」
551 二十二回忌	寛政 12 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	撰法講	眞應僧正		「禁裏執次詰所日記」
552 二十五回忌	享和 3 年 10 月 5 ～ 9 日	光格天皇	禁裏御所 (光格) 清涼殿	○	撰法講	極井宮承真法親王		「忠良公記」
553 二十六回忌	文化元年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	—	御経供養	勝安義院清海僧正		「禁裏執次詰所日記」
554 二十七回忌	文化 2 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧 御経供養	巖山寺 上乗院前大僧正		「禁裏執次詰所日記」
555		光格天皇	泉涌寺	—	大施餽鬼	清海長老		「禁裏執次詰所日記」
556	文化 8 年 10 月 5 ～ 9 日	光格天皇	禁裏御所 (光格) 清涼殿	○	撰法講	天台座主極井宮承真法親王		「禁裏執次詰所日記」「公卿補任」
557		光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	遍迎院、二尊院		「禁裏執次詰所日記」
558 三十三回忌	文化 8 年 10 月 8 ・ 9 日	光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 撰法	清海長老、大願長老		「禁裏執次詰所日記」
559	文化 8 年 10 月 28 日	後桜町上皇	般舟院	○	撰法	般舟院		「清中執次詰所日記」
560	文化 8 年 10 月 29 日	後桜町上皇	泉涌寺	○	撰法講	大願長老		「清中執次詰所日記」
561 三十四回忌	文化 9 年 10 月 29 日	光格天皇	般舟院	—	施餽鬼	般舟院		「禁裏執次詰所日記」
562	文化 9 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	—	御経供養	—		「伊光記」
563 三十五回忌	文化 10 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	眞海僧都		「山科忠言卿伝奏記」
564 三十六回忌	文化 11 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	眞應僧正		「山科忠言卿伝奏記」
565 三十七回忌	文化 12 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	若王子権僧正盈源		「平田職厚日記」
566 三十八回忌	文化 13 年 11 月 9 日	光格天皇	般舟院	○	御経供養	常住金剛院僧正眞應		「平田職厚日記」

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
567 四十五回忌	文政 6 年 11 月 9 日	光格上皇	般舟院	—	—	(寺門)		『日次案』
568	文政 10 年 11 月 9 日	光格上皇	泉涌寺	—	大施餓鬼	大願長老		『洞中軌次語所日記』
569 四十九回忌	文政 11 年 10 月 5 日	光格上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『橋本実久日記』
570	文政 11 年 10 月 7～9 日	光格上皇	般舟院 (光格) 小御所	○	懺法講	天台座主梶井宮承真法親王		『橋本実久日記』
571	文政 11 年 10 月 7～9 日	光格上皇	仙洞御所 (光格) 小御所	○	懺法講	天台座主梶井宮承真法親王		『橋本実久日記』
572 五十回忌	文政 11 年 10 月 8・9 日	仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	遙迎院、蘆山寺		『禁裏軌次語所日記』
573		仁孝天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	大願長老、明舒長老		『禁裏軌次語所日記』
574	天保 2 年 11 月 9 日	光格上皇	般舟院	—	—	—		『日次案』
575		光格上皇	泉涌寺	—	—	—		『日次案』
576	天保 3 年 11 月 9 日	光格上皇	般舟院	—	—	—		『日次案』
577 五十四回忌	天保 3 年 11 月 9 日	光格上皇	泉涌寺	—	—	—		『日次案』
578	天保 5 年 11 月 9 日	光格上皇	般舟院	—	—	—		『日次案』
579		光格上皇	般舟院	—	—	—		『日次案』
580	天保 6 年 11 月 9 日	光格上皇	泉涌寺	—	—	—		『日次案』
581		光格上皇	般舟院	—	—	—		『日次案』
582 六十四回忌	天保 13 年 10 月 29 日	新清和院	泉涌寺	—	大施餓鬼	—		『日並記』
583	天保 14 年 10 月 29 日	新清和院	泉涌寺	—	大施餓鬼	—		『日並記』
584 六十五回忌	天保 14 年 11 月 9 日	仁孝天皇	泉涌寺	—	大施餓鬼	—		『日並記』
585	天保 15 年 10 月 29 日	新清和院	泉涌寺	—	大施餓鬼	—		『日並記』
586 六十六回忌	天保 15 年 11 月 9 日	仁孝天皇	泉涌寺	—	大施餓鬼	—		『日並記』

⑨後醍醐天皇 文化10年閏11月3日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
587 一周忌	文化 11 年 10 月 2・3 日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧、四箇 法要	蘆山寺、般舟院		『山科忠言卿伝奏記』
588		光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	大願長老、潜海長老	上使中樞大和守、所司代が焼香のた め参詣	『山科忠言卿伝奏記』
589		光格天皇	般舟院	○	六道講式、聲明 例時	蘆山寺、般舟院		『山科忠言卿伝奏記』
590 三回忌	文化 12 年 10 月 2・3 日	光格天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	大願長老、潜海長老		『山科忠言卿伝奏記』
591	文政 2 年 10 月 2・3 日	光格上皇	仙洞御所 (光格) 小御所	○	懺法講	天台座主梶井宮承真法親王		『洞中軌次語所日記』
592 七回忌	文政 2 年 10 月 2・3 日	仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	蘆山寺、蘆山寺		『山科忠言卿伝奏記』
593		仁孝天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	大願長老、潜海長老		『山科忠言卿伝奏記』
594	文政 8 年 10 月 2・3 日	光格上皇	仙洞御所 (光格) 小御所	○	懺法講	天台座主梶井宮承真法親王		『橋本実久日記』
595		仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	蘆山寺、般舟院		『禁裏軌次語所日記』
596 十三回忌	文政 8 年 10 月 2・3 日	仁孝天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	大願長老、泉海長老		『禁裏軌次語所日記』
597 十六回忌	文政 11 年 11 月 3 日	光格上皇	般舟院	—	—	—		『日次案』
598	文政 12 年 10 月 2・3 日	光格上皇	仙洞御所 (光格) 小御所	○	懺法講	天台座主梶井宮承真法親王		『橋本実久日記』
599	文政 12 年 11 月 3 日	仁孝天皇	般舟院	○	法華三昧	遙迎院		『橋本実久日記』
600 十九回忌	天保 2 年 11 月 3 日	光格上皇	般舟院	—	法華三昧	—		『日次案』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
601 二十回忌	天保3年閏11月3日	光格上皇	般若院	—	—	—	—	『日次集』
602 二十一回忌	天保4年11月3日	光格上皇	般若院	—	—	—	—	『日次集』
603 二十二回忌	天保5年11月3日	光格上皇	般若院	—	—	—	—	『日次集』
604 二十三回忌	天保6年11月3日	光格上皇	般若院	—	—	—	—	『日次集』
605 二十五回忌	天保8年10月2・3日	光格上皇	仙洞御所(光格) 小御所	○	懺法講	樞井宮承真法親王	—	『橋本実久日記』
606 二十五回忌	天保8年10月2・3日	仁孝天皇	般若院	○	弥陀三昧、如法念仏	二尊院、蘆山寺	—	『禁裏執次諸所日記』
607 三十回忌	天保13年11月3日	仁孝天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	明舒長老、明舒長老	—	『禁裏執次諸所日記』
608 三十一回忌	天保14年11月3日	新清和院	泉涌寺	×	大施餽鬼	—	—	『日並記』
609 三十二回忌	天保15年11月3日	新清和院	泉涌寺	×	大施餽鬼	—	—	『日並記』
610 三十三回忌	弘化2年10月2・3日	仁孝天皇	般若院	○	—	—	—	『橋本実久日記』
611 三十三回忌	弘化2年10月2・3日	仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—	—	『橋本実久日記』
612 五十回忌	文久2年10月2・3日	孝明天皇	般若院	○	—	—	—	『山科言成卿記』
613 五十回忌	天保11年11月19日死去	孝明天皇	泉涌寺	○	一、法華懺法	尋玄長老、象海長老	—	『日並記』

⑨光格天皇 天保11年11月19日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
615 一周忌	天保12年11月18・19日	仁孝天皇	般若院	○	法華三昧	二尊院、蘆山寺	—	『橋本実久日記』
616 三十三回忌	天保13年10月15～19日	仁孝天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	誓純長老、泉海長老	—	『橋本実久日記』
617 三十三回忌	天保13年10月18・19日	仁孝天皇	禁裏御所(仁孝) 清涼殿	○	懺法講	天台座主輪王寺宮舜仁法親王	四王院僧正明道が調声を助める	『橋本実久日記』『公卿補任』
618 三十三回忌	天保13年10月18・19日	仁孝天皇	般若院	○	—	—	—	『野宮定祥日記』
619 三十三回忌	天保13年10月18・19日	仁孝天皇	泉涌寺	○	法華懺法	誓純長老、泉海長老	—	『日並記』
620 三十三回忌	天保13年11月19日	新清和院	泉涌寺	×	理趣三昧、土砂加持	泉海長老、誓純長老	—	『日並記』
621 三十三回忌	天保14年11月19日	仁孝天皇	般若院	○	御経供養	尊勝院権僧正	『内々法事』	『禁裏執次諸所日記』
622 三十三回忌	天保14年11月19日	仁孝天皇	泉涌寺	—	土砂加持	誓純長老	—	『禁裏執次諸所日記』
623 三十三回忌	天保14年11月19日	仁孝天皇	蘆山寺	—	法華三昧	蘆山寺長老	—	『禁裏執次諸所日記』
624 三十三回忌	天保14年11月19日	新清和院	泉涌寺	×	大施餽鬼	—	—	『日並記』
625 三十三回忌	天保15年11月19日	仁孝天皇	般若院	—	御経供養	—	—	『橋本実久日記』
626 三十三回忌	天保15年11月19日	仁孝天皇	泉涌寺	—	土砂加持	—	—	『日並記』
627 三十三回忌	弘化2年11月19日	新清和院	泉涌寺	×	大施餽鬼	—	—	『日並記』
628 三十三回忌	弘化3年11月18・19日	仁孝天皇	般若院	—	御経供養	—	—	『橋本実久日記』
629 三十三回忌	弘化3年11月18・19日	孝明天皇	般若院	○	—	—	—	『野宮定祥日記』
630 三十三回忌	嘉永元年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	○	—	—	—	『野宮定祥日記』
631 三十三回忌	嘉永2年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	土砂加持	泉海長老	—	『日並記』
632 三十三回忌	嘉永2年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	土砂加持	—	—	『日並記』
633 三十三回忌	嘉永3年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	土砂加持	—	—	『日並記』
634 三十三回忌	嘉永4年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	土砂加持	—	—	『日並記』
635 三十三回忌	嘉永5年10月18・19日	孝明天皇	般若院	○	弥陀三昧、如法念仏	般若院、二尊院	—	『橋本実久日記』
636 三十三回忌	嘉永6年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、—	誓純長老、—	—	『橋本実久日記』
637 三十三回忌	嘉永6年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—	—	『日並記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
638 十五回忌	安政元年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	土砂加持	—		『日並記』
639 十六回忌	安政2年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
640 十七回忌	安政3年11月18・19日	孝明天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	象海長老、明寅長老		『日並記』
641 十八回忌	安政4年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
642 十九回忌	安政5年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	土砂加持	—		『日並記』
643 二十回忌	安政6年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
644 二十一回忌	貞延元年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
645 二十二回忌	文久元年11月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
646 二十三回忌	文久2年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	象海長老		『日並記』
647 二十四回忌	文久3年10月19日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
648 二十五回忌	元治元年10月18・19日	孝明天皇	般舟院	—	—	—		『野宮定功日記』
649 二十六回忌	慶應元年10月13日	孝明天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	尋玄長老、象海長老		『日並記』
650 二十七回忌	慶應2年10月26日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	湛然長老	新潮平門院十八回忌法要と同時に開催	『日並記』
651 二十八回忌	明治2年10月26日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	尊玄長老		『日並記』

⑤仁孝天皇 弘化3年正月26日死去、忌日は2月6日

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
652 一回忌	弘化4年正月26日	孝明天皇	般舟院	—	施餓鬼	二尊院		『禁裏執次詰所日記』
653 二回忌	弘化4年2月5・6日	孝明天皇	般舟院	○	理趣三昧、法華懺法	一、二尊院	所司代以下武家参勤	『禁裏執次詰所日記』
654 三回忌	嘉永元年2月2～6日	孝明天皇	泉涌寺	○	懺法	泉海長老、誓觀長老		『日並記』
655 四回忌	嘉永元年2月5・6日	孝明天皇	般舟院	○	懺法講、如法念仏	天台座主妙法院宮入道敦仁親王		『橋本実久日記』
656 五回忌	嘉永元年2月5・6日	孝明天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	泉海長老、誓觀長老		『懺法講一会』
657 六回忌	嘉永2年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	懺法	—		『日並記』
658 七回忌	嘉永3年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
659 八回忌	嘉永4年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
660 九回忌	嘉永5年2月2～6日	孝明天皇	禁裏御所 (孝明)	○	懺法講	四王院僧正明道		『日並記』
661 十回忌	嘉永6年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
662 十一回忌	嘉永7年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
663 十二回忌	安政2年2月6日	孝明天皇	般舟院	○	御経供養	攝關権正		『武家書翰往来』
664 十三回忌	安政2年2月6日	孝明天皇	般舟院	—	—	—		『日並記』
665 十四回忌	安政3年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	○	御経供養	實澄僧正		『武家書翰往来』
666 十五回忌	安政3年2月6日	孝明天皇	般舟院	—	光明三昧	—		『日並記』
667 十六回忌	安政4年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	懺法講	本質成院僧正良海		『橋本実久日記』
668 十七回忌	安政5年2月2～6日	孝明天皇	禁裏御所 (孝明)	○	懺法講	—		『橋本実久日記』
669 十八回忌	安政5年2月5・6日	孝明天皇	泉涌寺	○	—	—		『橋本実久日記』
670 十九回忌	安政6年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
671 二十回忌	貞延元年2月6日	孝明天皇	般舟院	○	御経供養	雄真権正		『武家書翰往来』
672 二十一回忌	貞延元年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
673 二十二回忌	萬延2年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着席	内 容	導 師	備 考	典 拠
676	文久2年2月2～6日	孝明天皇	禁裏御所(孝明) 清涼殿	○	饗法講	天台座主梶井官昌仁親王	梶井官不参のため、實成院僧正長海が導師を勤める	『九条家文書』
677	十七回忌	文久2年2月5・6日	孝明天皇	○	御題三昧、法華懺法	泉涌長老、湛然長老		『日並記』
678	十八回忌	文久2年2月6日	英照皇太后	—	—	湛然長老		『日並記』
679	文久3年2月6日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	泉涌長老		『日並記』
680	十九回忌	文久4年2月6日	孝明天皇	—	—	—		『日並記』
681	二十回忌	元治2年2月6日	孝明天皇	—	光明三昧	—		『日並記』
682	二十一回忌	慶応2年2月6日	孝明天皇	—	光明三昧	尋玄長老		『日並記』

典拠：『基量御記』『日野輝光御記』『永貞御記』『日野西實敬日記』『御原光日記』『橋本実久日記』『野宮定晴日記』『野宮定功日記』『山科忠言御記』『山科忠言御伝奏記』『山科言成御記』『平田職厚日記』『宮内庁書陵部所蔵、『道房公記』『尚実公記』『宮内庁書陵部所蔵、東京大学史料編纂所「Hi-CAT Plus」を使用、『孝亮宿所記』『忠利宿所記』『知音宿所記』『泰重御記』『御原均光日記』『宮内庁書陵部所蔵、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」を使用、『基長御記』『基恒御記』『頼言御記』『宮内庁書陵部所蔵写本、『般舟三昧院御用日記表書』『實康日記』『宮内庁書陵部所蔵写本、国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」を使用、『康道公記』『実権公記』『公明記』『東京大学史料編纂所所蔵、『伊光記』『无上法院院御日記』『東京大学史料編纂所所蔵写本、『兼香公記』『良公記』『東京大学史料編纂所所蔵写本、同「所蔵史料目録データベース」を使用、『宣師御記』『賢勝御記』『八槻御記』『頼房御記』『傳房御記』『国立公文書館所蔵写本、同「デジタルアーカイブ」を使用、『光卿御記』『西尾市岩瀬文庫所蔵、『高嗣公記』『経國公記』『京都府立京都学・歴彩館公開陽明文庫デジタル画像、『日並記』『泉涌寺所蔵、『師庫御臣記』『百武録』『饗法講一合』『非蔵人日記』『武家書翰往来』『史料編纂本』『東京大学史料編纂所所蔵、同「近世編年データベース」を使用、『西巻之日記』『陽光院十七回御忌泉涌寺御法事記』『仙洞儀式并櫻庭祐吉室略記』『高嗣公記 別記』『憲臺記』『東山院廿五回聖忌宸賞人講行香之事聞東江申遺留』『葵中日次記』『葵真帝衆所日記』『瀬中執次品所日記』『日次案』『院中奉衆所日記』『御邊殿上日記』『仙洞女房日記』『後桃園天皇実録』『正親町天皇実録』『光格天皇実録』『仁孝天皇実録』『孝明天皇実録』ゆまに書房、2005～2006年）、『九条家文書』（『孝明天皇紀』吉川弘文館、1967年）、『仙洞儀式記』（『相国寺史稿』思文閣出版、1986～1997年）、『公卿補任』（新訂増補版、吉川弘文館、1974～1976年）、『続史略抄』（新訂増補版、吉川弘文館、1966年）、『おゆどの』うへの日記』（『総群書類従』岩波書店、1959～1991年）、『森田記』（『続群書類従完成会、1981～1996年）、『通元公記』（『続群書類従完成会・八木書店、1991年～2008年）、『泰重御記』（『総群書類従完成会、1993～2004年）、『時慶記』（『随川書店、2002年～2019年）。

表4 近世女院の年忌法要（新上東門院～新待賢門院を対象）

①新上東門院 元和6年2月18日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
1 一周忌	元和7年2月16日	中和門院	般舟院	○	—	—		『資勝卿記』
2 三回忌	元和7年2月18日	後水尾天皇	般舟院	○	—	—		『資勝卿記』
3 三回忌	元和8年2月18日	後水尾天皇	般舟院	○	曼陀羅供	—		『孝亮公格記』
4 七回忌	寛永3年2月18日	後水尾天皇	般舟院	○	曼陀羅供	—		『資勝卿記』
5 三十三回忌	承応元年2月18日	後水尾上皇	泉涌寺	○	—	—		『隔冥記』
6 五十回忌	寛文9年2月18日	後水尾上皇	泉涌寺	○	曼陀羅供	—		『葉室頼業記』『絳史愚抄』

②中和門院 寛永7年7月3日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
7 三回忌	寛永9年7月2・3日	後水尾上皇	仙洞御所（後水尾）	○	懺法講	相井宮慈胤法親王		『時慶記』『泰重卿記』
8 七回忌	寛永13年7月2・3日	後水尾上皇	仙洞御所（後水尾）	○	法華懺法 曼陀羅供	青蓮院宮尊純法親王		『道房公記』
9 十三回忌	寛永19年7月2・3日	後水尾上皇	仙洞御所（後水尾）	○	結縁灌頂	大覚寺宮尊性法親王		『尚嗣公記』
10 十三回忌	寛永19年7月3日	明正天皇	般舟院	○	法華懺法	—		『康道公記』
11 十七回忌	正保3年7月3日	後水尾上皇	仙洞御所（後水尾）	—	観音懺法	覺雲（相国寺衆）		『隔冥記』『尚嗣公記』
12 二十五回忌	承応3年7月3日	後水尾上皇	般舟院	○	曼陀羅供	—		『宣順卿記』
13 三十三回忌	寛文2年7月3日	後水尾上皇	相国寺	○	観音懺法	春葩（相国寺衆）		『隔冥記』
14 五十回忌	延宝7年7月3日	後水尾上皇	般舟院	○	—	—		『永貞卿記』
15		後水尾上皇	泉涌寺	○	理趣三昧	—		『基殿公記』
16		徳元上皇	般舟院	○	例時、如法念仏	—		『院中番衆所日記』
17 百回忌	享保14年7月2・3日	徳元上皇	泉涌寺	○	梵講講誦、法華三昧	—		『院中番衆所日記』
18		中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』

③壬生院 明暦2年2月11日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
19 一周忌	明暦3年2月11日	後水尾上皇	般舟院	○	—	—		『忠利宿格記』
20 三回忌	明暦4年2月11日	後西天皇	般舟院	○	—	—		『官公事抄』
21	寛文8年2月10・11日	後水尾上皇	般舟院	○	—	—		『葉室頼業記』
22 十三回忌		後水尾上皇	泉涌寺	○	舍利講	—		『絳史愚抄』
23		後西天皇	般舟院	—	—	—		『泰徳法親王日記』
24	寛文8年2月11日	後西天皇	泉涌寺	—	—	—		『義徳法親王日記』
25		後水尾上皇	般舟院	○	—	—		『葉室頼業記』
26		後水尾上皇	泉涌寺	○	舍利講	—		『絳史愚抄』
27 十七回忌	寛文12年2月11日	後水尾上皇	仙洞御所（後水尾） 広御殿	—	梵語心経	相国寺衆	明正上皇、照光院宮、聖護院宮、緋宮、門照寺宮、東福門院他女中衆が聴聞	『无上法院殿御日記』
28 二十五回忌	延宝8年2月11日	徳元天皇	泉涌寺	○	法華懺法	—		『基殿卿記』
29 三十三回忌	貞享5年2月10・11日	徳元天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華懺法	—		『院中番衆所日記』
30 五十回忌	宝永2年2月10・11日	徳元上皇	泉涌寺	○	理趣三昧、—	卓岩長老、—		『絳史愚抄』『院中番衆所日記』

④新広義門院 延宝5年7月5日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
31 一週忌	延宝6年7月4・5日	靈元天皇	泉涌寺	○	—	—	—	『基熙公記』
32	延宝6年7月5日	後水尾上皇	般舟院	○	—	—	—	『淳房卿記』
33 三回忌	延宝7年7月4・5日	靈元天皇	般舟院	○	如法念仏、聲名 懺法	—	—	『兼輝公記』「百式錄」
34	延宝7年7月5日	靈元天皇	泉涌寺	○	—	—	—	『兼輝公記』
35	延宝7年7月5日	後水尾上皇	泉涌寺	○	—	—	—	『兼輝公記』
36	延宝7年7月4・5日	靈元天皇	般舟院	○	法華三昧、如法 念仏	—	—	『森中日次記』
37 七回忌	天和3年7月4・5日	靈元天皇	泉涌寺	○	講 理趣三昧、舍利	—	—	『森中日次記』
38	元禄2年7月4・5日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）御公間	○	懺法講	常修院宮慈胤法親王	所勞のため常修院宮は動仕せず	『基胤卿記』
39 十三回忌	元禄2年7月4・5日	靈元上皇	般舟院	○	施餓鬼	般舟院	所勞のため常修院宮は動仕せず	『緯史愚抄』
40	元禄2年7月4・5日	靈元上皇	泉涌寺	○	法華懺法	孤雲長老	—	『緯史愚抄』
41 十七回忌	元禄6年7月4・5日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）御公間	○	懺法講	常修院宮慈胤法親王	所勞のため常修院宮は動仕せず、持 明院大僧正盛観が名代として導師を 勤める	『季連宮侍記』『堯恕法親王日記』
42	元禄6年7月4・5日	靈元上皇	般舟院	○	如法念仏	願山寺	—	『緯史愚抄』
43	元禄10年7月	靈元上皇	泉涌寺	○	土砂加持	湛恵長老	—	『緯史愚抄』
44 二十一回忌	元禄10年7月	靈元上皇	般舟院	—	—	—	—	『般舟三昧院御用日記披露』
45 二十五回忌	元禄14年7月4・5日	靈元上皇	般舟院	○	—	—	—	『院中番衆所日記』
46	元禄14年7月4・5日	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—	—	『院中番衆所日記』
47 三十三回忌	宝永6年7月4・5日	靈元上皇	般舟院	○	施餓鬼、四箇法 要	—	—	『院中番衆所日記』
48	宝永6年7月4・5日	靈元上皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	—	—	『院中番衆所日記』
49 五十回忌	享保11年7月4・5日	靈元上皇	仙洞御所（靈元）小御所	○	御経供養	天台座主青蓮院宮尊祐法親王	浄圓院死去のため懺法講を停止	『通見公記』
50	享保11年7月4・5日	靈元上皇	般舟院	○	—	—	—	『院中番衆所日記』
51	享保11年7月4・5日	靈元上皇	泉涌寺	○	—	—	—	『院中番衆所日記』

⑤東福門院 延宝6年6月15日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
52	延宝7年6月10・11日	後西上皇	泉涌寺	○	御経供養、土砂 加持	—	—	『兼輝公記』
53	延宝7年6月11・12日	明正上皇	泉涌寺	○	光明三昧、御経 供養	—	—	『兼輝公記』
54 一周忌	延宝7年6月12・13日	後水尾上皇	般舟院	○	—	—	—	『兼輝公記』
55	延宝7年6月12・13日	後水尾上皇	泉涌寺	○	大施餓鬼、理趣 三昧	—	—	『兼輝公記』
56	延宝7年6月14・15日	靈元天皇	般舟院	○	大施餓鬼、法華 懺法	—	—	『兼輝公記』
57	延宝7年6月14・15日	靈元天皇	泉涌寺	○	梵講講讃、法華 懺法	—	—	『兼輝公記』

	形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠	
58	三回忌	延宝8年6月9・10日	後西上皇	泉涌寺	○	大施餽鬼、法華三昧	—		『基熙公記』	
59		延宝8年6月11・12日	明正上皇	泉涌寺	○	—	—		『兼綱公記』	
60		延宝8年6月12・13日	後水尾上皇	般舟院	○	例時、施餽鬼	—		『庭田重冬日記』	
61	三回忌	延宝8年6月13～15日	後水尾上皇	泉涌寺	○	梵講講讃、法華懺法	—		『基熙公記』	
62			靈元天皇	禁裏御所(靈元) 清涼殿	○	法華懺法	毘沙門堂宮公辨法親王	將軍徳川家綱死去のため懺法講を停止	『兼綱公記』	
63	七回忌	貞享元年6月10・11日	後西上皇	泉涌寺	○	土砂加持、法華懺法	—		『兼綱公記』	
64		貞享元年6月11～15日	靈元天皇	禁裏御所(靈元) 清涼殿	○	懺法講	毘沙門堂宮公辨法親王		『兼綱公記』	
65		貞享元年6月14・15日	靈元天皇	般舟院	○	施餽鬼、曼陀羅供	—		『兼綱公記』	
66	九回忌	貞享3年6月	泉涌寺	○	御経供養、理題三昧	—		『兼綱公記』		
67			貞享3年6月	靈元天皇	般舟院	—	—		『兼綱公記』	
68			貞享4年6月	靈元天皇	般舟院	—	—		『般舟三昧院御用日次抜書』	
69	十三回忌	元禄3年6月12・13日	明正上皇	泉涌寺	—	—	—		『基熙公記』	
70		元禄3年6月14・15日	東山天皇	般舟院	○	—	—	高家大友義孝より香奠が献上	『基熙公記』	
71		元禄3年6月14・15日	東山天皇	泉涌寺	○	—	—		『基熙公記』	
72	十三回忌	元禄3年6月14・15日	靈元上皇	仙洞御所(靈元) 御会間	○	懺法講	持明院権僧正盛親ほか9名		『院中番衆所日記』	
73		元禄7年6月12・13日	明正上皇	泉涌寺	—	光明三昧、不明	孤雲長老		『緯史愚抄』	
74	十七回忌	元禄7年6月14・15日	東山天皇	般舟院	○	聲明例時、胎曼陀羅供	蓮迎院、蘆山寺		『緯史愚抄』	
75			東山天皇	泉涌寺	○	法華懺法、理題三昧	津真長老、卓敬長老	高家由良頼繁より香奠が献上	『緯史愚抄』	
76	二十五回忌	元禄7年6月14・15日	靈元上皇	仙洞御所(靈元) 御会間	○	法華懺法	持明院権僧正盛親ほか7名		『院中番衆所日記』	
77		元禄15年6月12・13日	靈元上皇	泉涌寺	○	不明	—		『院中番衆所日記』	
78		二十五回忌	元禄15年6月14・15日	東山天皇	般舟院	○	不明、四箇法要	—		『季連宮内記』
79	東山天皇			泉涌寺	○	法華懺法、理題三昧	卓肇長老、卓敬長老		『緯光御記』	
80	三十三回忌	宝永7年6月12・13日	靈元上皇	般舟院	○	法華三昧、如法念仏	不明、		『院中番衆所日記』	
81			宝永7年6月12・13日	靈元上皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵講講讃	不明、卓岩長老		『緯光御記』
82			宝永7年6月14・15日	中御門天皇	般舟院	○	—	—	上使前田伊豆守が同寺へ参詣、「東福門」院徳川家息女故也。	『緯光御記』(寛義朝臣記)
83	五十回忌	享保12年6月12・13日	中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『緯光御記』	
84			享保12年6月12・13日	靈元上皇	般舟院	○	法華三昧、如法念仏	—		『院中番衆所日記』
85			享保12年6月14・15日	靈元上皇	泉涌寺	○	光明三昧、梵講講讃	—		『院中番衆所日記』
86	五十回忌	享保12年6月14・15日	靈元上皇	仙洞御所(靈元) 小御所	○	懺法講	梶井宮道仁法親王		『院中番衆所日記』	
87			中御門天皇	般舟院	○	—	—		『寛方朝臣記抄』	
88			中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『寛方朝臣記抄』	

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
89	安永6年6月13日	後桜町上皇	般舟院	○	—	—	—	『院中番衆所日記』
90	百回忌	後桜町上皇	泉涌寺	○	—	—	—	『院中番衆所日記』
91	安永6年6月14・15日	後桃園天皇	般舟院	○	—	—	—	『御原紀光日記』
92		後桃園天皇	泉涌寺	○	—	—	—	『御原紀光日記』

⑥逢春門院 貞享2年5月22日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
--------	-----	-----	------	----------	-----	-----	-----	-----

⑦新上西門院 正徳2年4月14日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
93	正徳3年3月13・14日	靈元上皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	虎渡長老、貫道長老	—	『御光御記』
94	正徳3年3月14日	中御門天皇	般舟院	○	懺法	蓮迎院	蓮後の法事はなく当日のみとするこ とが治定	『御光御記』
95	正徳4年3月13・14日	靈元上皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	卓岩長老、虎渡長老	—	『御光御記』
96	正徳4年3月14日	中御門天皇	般舟院	○	法華懺法	蓮迎院	—	『御光御記』
97	正徳5年3月	—	般舟院	—	—	—	—	『御光御記』
98	享保3年3月13・14日	靈元上皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	—	—	『院中番衆所日記』
99	享保3年3月14日	中御門天皇	般舟院	○	—	—	—	『禁裏番衆所日記』
100	享保9年3月13・14日	靈元上皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	昭山長老、舜芝長老	—	『院中番衆所日記』
101	享保9年3月14日	中御門天皇	般舟院	○	—	—	—	『後中内記』
102	享保13年3月13・14日	靈元上皇	泉涌寺	○	法華懺法、理趣 三昧	舜芝長老、大収長老	—	『院中番衆所日記』
103	享保13年3月14日	中御門天皇	般舟院	○	—	二尊院	—	『寶方朝臣記抄』
104	享保21年3月14日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院	—	『通兄公記』
105	延享元年3月14日	桜町天皇	般舟院	○	聲明例時	二尊院	—	『頼房御記』
106	宝暦11年3月14日	桃園天皇	泉涌寺	○	—	—	—	『野宮定晴日記』
107	五十回忌	桃園天皇	般舟院	○	—	—	—	『野宮定晴日記』
108	文化8年3月29日	光格天皇	般舟院	○	—	—	—	『伊光記』

⑧新崇賢門院 宝永6年12月29日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
109	宝永7年11月28・29日	中御門天皇	蘆山寺	○	例時、法華懺法	蓮迎院、蘆山寺	—	『御光御記』
110	宝永7年11月29日	中御門天皇	般舟院	○	如法念仏、聲明 懺法	蓮迎院、蘆山寺	—	『御光御記』
111	正徳元年11月28・29日	中御門天皇	蘆山寺	○	—	—	—	『御光御記』
112	正徳元年11月29日	中御門天皇	般舟院	○	—	—	—	『御光御記』
113		中御門天皇	蘆山寺	○	念仏三昧、法華 三昧	二尊院、蘆山寺	—	『御光御記』
114	正徳5年11月28・29日	中御門天皇	般舟院	○	例時、光明真言 供	二尊院、般舟院	—	『御光御記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
115 十三回忌	享保6年12月28・29日	中御門天皇	麓山寺 般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
116		中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
117 十七回忌	享保10年12月28・29日	中御門天皇	麓山寺 般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
118		中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
119 二十五回忌	享保18年12月28・29日	中御門天皇	麓山寺 般舟院	○	—	—		『八槻御記』
120		中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
121 三十三回忌	寛保元年11月	桜町天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次披露』
122 五十回忌	宝暦8年11月29日	桃園天皇	般舟院	○	如法念仏	遣迎院	『敦法門院十七回之例云々』	『和房御記』

⑨新中和門院 享保5年正月20日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
123 一周忌	享保6年正月19・20日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
124		中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御邊殿上日記』
125 三回忌	享保7年正月19・20日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
126		中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御邊殿上日記』
127 四回忌	享保8年正月	中御門天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次披露』
128 七回忌	享保11年正月19・20日	中御門天皇	般舟院	○	—	—		『御邊殿上日記』
129		中御門天皇	泉涌寺	○	—	—		『御邊殿上日記』
130 十三回忌	享保17年正月19・20日	中御門天皇	般舟院	×	—	—	『隆失以後未御修造』のたゞ公卿着座なし	『通兄公記』
131		中御門天皇	泉涌寺	○	理趣三昧、法華 懺法	大僧長老、釋文長老		『墓墓記』
132 十七回忌	享保21年正月19・20日	桜町天皇	般舟院	○	如法念仏、胎受 茶羅供	麓山寺、二尊院		『和房御記』
133		桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		『和房御記』
134 十八回忌	元文2年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
135 十九回忌	元文3年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
136 二十回忌	元文4年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
137 二十一回忌	元文5年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
138 二十二回忌	元文6年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
139 二十三回忌	寛保2年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	—	—		『通兄公記』
140 二十四回忌	寛保3年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
141		桜町天皇	養真御所 (桜町)	○	懺法講	樺井宮教仁入道親王		『八槻御記』
142 二十五回忌	寛保4年正月18～20日	桜町天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	遣迎院、二尊院	『國母年忌被懺法講例無之歟、但近 者東福門院年忌之時被行例云々』	『和房御記』
143		桜町天皇	泉涌寺	○	—	—		『和房御記』
144 二十六回忌	延享2年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	遣迎院		『和房御記』
145 二十七回忌	延享3年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	二尊院		『和房御記』
146 二十八回忌	延享4年正月20日	桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	遣迎院		『和房御記』
147 二十九回忌	延享5年正月	桜町天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次披露』
148 三十回忌	寛延2年正月	桜町天皇	般舟院	—	—	—		『般舟三昧院御用日次披露』
149 三十一回忌	寛延3年正月	桜町天皇	般舟院	—	—	—		『和房御記』
150 三十三回忌	宝暦2年正月19・20日	桃園天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法 念仏	般舟院、遣迎院		『和房御記』
151		桃園天皇	泉涌寺	○	一、法華懺法	一、照峯長老		『慈蘇記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
152 五十回忌	明和6年正月19・20日	後桜町天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	二尊院、般舟院		『御原紀光日記』
153		後桜町天皇	泉涌寺	○	一、一	一、照峯長老		『御原紀光日記』

⑩承秋門院 享保5年2月10日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
154 一周忌	享保6年2月9・10日	中御門天皇	般舟院	一	一	一		『御邊殿上日記』
155		中御門天皇	泉涌寺	○	法華三昧、羅漢供	照山長老、虎溪長老		『日野西資敬日記』
156 三回忌	享保7年2月9・10日	中御門天皇	般舟院	○	一	一		『御邊殿上日記』
157		中御門天皇	泉涌寺	○	一	一		『御邊殿上日記』
158 七回忌	享保11年2月9・10日	中御門天皇	般舟院	○	一	一		『御邊殿上日記』
159		中御門天皇	泉涌寺	○	一	一		『御邊殿上日記』
160 十三回忌	享保17年2月9・10日	中御門天皇	般舟院	×	法華三昧、羅漢供	一	般舟院焼失のため公卿着座なし	『御邊殿上日記』
161		中御門天皇	泉涌寺	○	一	一		『御邊殿上日記』
162 十七回忌	享保21年2月9・10日	中御門上皇	般舟院	○	弥陀三昧、四箇法要	一		『御邊殿上日記』
163		中御門上皇	泉涌寺	○	一	一		『御邊殿上日記』
164	享保21年2月10日	桜町天皇	般舟院	○	光明真言供	一		『御邊殿上日記』
165 二十五回忌	寛保4年2月9・10日	桜町天皇	般舟院	○	一	一		『通兄公記』
166		桜町天皇	泉涌寺	○	一	一		『通兄公記』
167 三十三回忌	享保22年2月10日	桃園天皇	般舟院	○	法華三昧	一		『御邊殿上日記』
168 五十回忌	明和6年2月10日	後桜町天皇	般舟院	○	法華三昧	般舟院		『御原紀光日記』

⑪敬法門院 享保17年8月30日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
169 一周忌	享保18年8月	中御門天皇	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
170 三回忌	享保19年8月28・29日	中御門天皇	般舟院	一	一	一		『兼香公記』
171 七回忌	元文3年7月30日	桜町天皇	般舟院	○	弥陀三昧	一		『般舟御記』
172 十三回忌	延享元年8月29日	桜町天皇	般舟院	○	如法念仏	二尊院		『般舟御記』
173 十七回忌	寛延元年8月	桜町天皇	般舟院	一	一	一		『般舟三昧院御用日次披露』
174 三十五回忌	宝暦6年8月29日	桃園天皇	般舟院	一	法華三昧	一		『般舟御記』
175 三十三回忌	明和元年7月29日	後桜町天皇	般舟院	一	一	一		『御邊殿上日記』
176 五十回忌	天明元年8月29日	光格天皇	般舟院	一	弥陀三昧	一		『日野資校公武御用雜記』

⑫盛化門院 天明3年10月12日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
177 一周忌	天明4年10月7日	女一宮(欣子)	泉涌寺	一	一	一		『女一宮女房日記』
178	天明4年10月9日	後桜町上皇	泉涌寺	一	一	一		『仙洞女房日記』
179		光格天皇	般舟院	○	如法念仏	一		『禁裏執次詰所日記』
180	天明4年10月11・12日	光格天皇	泉涌寺	○	法華懺法	一		『禁裏執次詰所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
220 六十一回忌	天保14年11月24日	新清和院	泉涌寺	×	光明三昧	—		『日並記』
221 六十五回忌	弘化4年10月24日	新清和院	泉涌寺	×	光明三昧	—		『日並記』

③開明門院 寛政元年9月22日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
222 一周忌	寛政2年9月21・22日	光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	遣迎院、般舟院		『柳原均光日記』
223 三回忌	寛政3年9月21・22日	光格天皇	般舟院	○	例時、法華三昧	遣迎院、般舟院		『柳原均光日記』
224 七回忌	寛政7年9月21・22日	光格天皇	般舟院	○	—	—	『今明開明門院御法事二付、今朝向神事延引也』	『慈良公記』
225 十三回忌	享和元年9月22日	光格天皇	淨華院内松林院	—	—	—	松林院より問い合わせあり	『禁裏執次諸所日記』
226 十七回忌	文化2年9月22日	光格天皇	般舟院	—	—	—		『伊光記』
227 二十五回忌	文化10年9月22日	光格天皇	般舟院	—	—	—		『山科忠言卿伝奉記』
228 五十回忌	天保9年9月22日	仁孝天皇	淨華院	○	法華三昧	二尊院		『禁裏執次諸所日記』
229 五十回忌			淨華院内松林院	—	—	—		『禁裏執次諸所日記』

④青綺門院 寛政2年正月29日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
231 一周忌	寛政3年正月28・29日	後桜町上皇	般舟院	○	弥陀三昧、法華三昧	遣迎院、般舟院		『洞中執次諸所日記』
232 三回忌	寛政3年正月29日	光格天皇	泉涌寺	○	梵誦講讃、理題三昧	泉岸長老、大澤長老		『洞中執次諸所日記』
233 三回忌	寛政4年正月28・29日	後桜町上皇	般舟院	○	如法念仏	般舟院		『禁裏執次諸所日記』
234 三回忌	寛政4年正月29日	仙阿御所	泉涌寺	○	法華懺法	大澤長老		『禁裏執次諸所日記』
235 三回忌	寛政4年正月29日	後桜町上皇	仙阿御所(後桜町)小御所	○	法華懺法	青蓮院宮尊真入道親王		『院中評定日記案』
236 三回忌	寛政4年正月29日	後桜町上皇	泉涌寺	—	理題三昧	青蓮院宮尊真入道親王		『洞中執次諸所日記』
237 三回忌	寛政4年正月28・29日	光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、六道講式	遣迎院、般舟院		『禁裏執次諸所日記』
238 三回忌	寛政4年正月28・29日	光格天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	月院長老、大澤長老		『禁裏執次諸所日記』
239 四回忌	寛政5年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	六道講式	般舟院		『洞中執次諸所日記』
240 五回忌	寛政6年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
241 六回忌	寛政7年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
242 七回忌	寛政8年正月28・29日	後桜町上皇	仙阿御所(後桜町)小御所	○	懺法講	持明院前大僧正良胤ほか衆僧9名		『院中評定日記案』
243 八回忌	寛政9年正月29日	後桜町上皇	泉涌寺	—	理題三昧	彌一長老		『洞中執次諸所日記』
244 九回忌	寛政9年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
245 十回忌	寛政10年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
246 十一回忌	寛政11年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	—	不嫁院		『洞中執次諸所日記』
247 十二回忌	寛政12年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	不嫁院		『洞中執次諸所日記』
248 十三回忌	寛政13年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	不嫁院		『洞中執次諸所日記』
249 十三回忌	享和2年正月27日	後桜町上皇	泉涌寺	○	理題三昧	泉岸長老		『洞中執次諸所日記』
250 十四回忌	享和3年正月29日	後桜町上皇	仙阿御所(後桜町)小御所	○	法華懺法	天台座主青蓮院宮尊真入道親王		『洞中執次諸所日記』
251 十五回忌	享和4年正月29日	後桜町上皇	般舟院	—	法華三昧	蘆山寺		『洞中執次諸所日記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
253 十六回忌	文化2年正月29日	後醍醐天皇	般舟院	—	法華三昧	廬山寺		『洞中執次諸所日記』
254		後醍醐上皇	仙洞御所(後醍醐)小御所	○	法華懺法	天台座主青蓮院宮尊真入道親王		『日次案』
255 十七回忌	文化3年正月28・29日	後醍醐上皇	般舟院	○	—	—		『忠良公記』
256		後醍醐上皇	泉涌寺	○	—	—		『忠良公記』
257 十八回忌	文化4年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
258 十九回忌	文化5年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	廬山寺		『洞中執次諸所日記』
259 二十回忌	文化6年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	廬山寺		『洞中執次諸所日記』
260 二十一回忌	文化7年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
261 二十二回忌	文化8年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
262 二十三回忌	文化9年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
263 二十四回忌	文化10年正月29日	後醍醐上皇	般舟院	—	法華三昧	般舟院		『洞中執次諸所日記』
264 二十五回忌	文化11年正月28・29日	光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	廬山寺、般舟院		『山科忠言卿伝奏記』
265		光格天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	潜海長老、大願長老		『山科忠言卿伝奏記』
266 五十回忌	天保10年正月29日	仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
267		仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—		『橋本実久日記』

⑨恭礼門院 寛政7年11月30日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
268 一周忌	寛政8年11月29・30日	光格天皇	般舟院	—	—	—		『実權公記』
269		後醍醐上皇	泉涌寺	—	理趣三昧、如法念仏	獨一長老		『洞中執次諸所日記』
270 三回忌	寛政9年11月29・30日	光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	通迎院、般舟院		『禁裏執次諸所日記』
271		光格天皇	泉涌寺	○	懺法	月晚長老、僧總長老		『禁裏執次諸所日記』
272	寛政9年11月30日	後醍醐上皇	泉涌寺	—	理趣三昧	僧總長老		『洞中執次諸所日記』
273	享和元年11月28日	後醍醐上皇	泉涌寺	—	理趣三昧	泰岸長老		『洞中執次諸所日記』
274		光格天皇	般舟院	○	如法念仏	廬山寺		『禁裏執次諸所日記』
275 七回忌	享和元年11月28・29日	光格天皇	泉涌寺	○	法華懺法	泰岸長老		『禁裏執次諸所日記』
276	文化4年11月28日	後醍醐上皇	泉涌寺	—	理趣三昧	潜海長老		『洞中執次諸所日記』
277 十三回忌		光格天皇	般舟院	○	弥陀三昧、法華三昧	般舟院、廬山寺		『禁裏執次諸所日記』
278	文化4年11月29・30日	光格天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	僧總長老、僧總長老		『禁裏執次諸所日記』
279 十七回忌	文化8年11月28日	後醍醐上皇	泉涌寺	—	理趣三昧	潜海長老		『洞中執次諸所日記』
280	文化8年11月29日	光格天皇	般舟院	○	法華三昧	般舟院		『禁裏執次諸所日記』
281		光格天皇	泉涌寺	○	法華懺法	潜海長老		『禁裏執次諸所日記』
282 二十五回忌	文政2年11月29・30日	仁孝天皇	般舟院	○	法華三昧	般舟院		『禁裏執次諸所日記』
283		仁孝天皇	泉涌寺	○	法華懺法	大願長老		『禁裏執次諸所日記』
284 三十三回忌	文政10年11月29・30日	仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『二条家番所日記』
285		仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—		『二条家番所日記』
286		仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
287 五十回忌	天保15年11月28・29日	仁孝天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	泉海長老、僧總長老		『日並記』
288	天保15年11月29日	新清和院	泉涌寺	×	光明三昧	僧總長老		『日並記』

⑥新皇嘉門院 文政6年4月3日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
289 一週忌	文政7年4月2・3日	仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	蘆山寺、般舟院		『正房卿記』
290	文政7年4月3日	光格上皇	般舟院	—	—	—		『正房卿記』
291	文政7年4月3日	光格上皇	泉涌寺	—	法華三昧	泉涌長老		『洞中執次語所日記』
292 三回忌	文政8年4月2・3日	仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	遣迎院、般舟院		『正房卿記』
293		仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—		『正房卿記』
294		仁孝天皇	般舟院	—	—	—		『洞中執次語所日記』
295	文政12年4月2・3日	仁孝天皇	泉涌寺	—	—	—		『洞中執次語所日記』
296		仁孝天皇	般舟院	○	弥陀三昧、如法念仏	般舟院、蘆山寺		『集真執次語所日記』
297	天保6年3月29・30日	仁孝天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	泉涌長老、明眸長老		『集真執次語所日記』
298		仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『野宮定功日記』
299	天保10年4月2・3日	仁孝天皇	泉涌寺	○	—	—		『野宮定功日記』
300	弘化2年4月3日	新明平門院	泉涌寺	×	大施願鬼	—		『日並記』
301		孝明天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実顔日記』
302	弘化4年4月2・3日	新清和院(旧女院御所)	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	誓經長老、泉涌長老		『日並記』
303		孝明天皇	般舟院	○	—	—		『野宮定祥日記』
304	安政2年4月2・3日	孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	—		『日並記』

⑦東京極院 天保14年3月21日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
305 一週忌	天保15年3月20・21日	仁孝天皇	新善光寺	×	光明三昧、法華懺法	泉涌長老、誓經長老		『集真執次語所日記』
306	天保15年3月21日	仁孝天皇	般舟院	○	如法念仏	般舟院		『集真執次語所日記』
307		仁孝天皇	般舟院	○	—	—		『野宮定祥日記』
308 三回忌	弘化2年3月20・21日	仁孝天皇	泉涌寺	×	光明三昧、法華懺法	泉涌長老、誓經長老		『日並記』
309		孝明天皇	般舟院	○	—	—		『博房卿記』
310	嘉永2年3月21日	孝明天皇	雲龍院	○	光明三昧	誓經長老		『日並記』
311	安政2年3月20日	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『武家往来書翰』
312		孝明天皇	般舟院	○	—	—		『武家往来書翰』
313	安政6年3月20日	孝明天皇	雲龍院	—	光明三昧	—		『日並記』

⑧新清和院 弘化3年6月20日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
314 一週忌	弘化4年6月19・20日	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実顔日記』
315		孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	泉涌長老、隱岳長老		『日並記』
316	弘化4年6月20日	新明平門院	泉涌寺	×	理趣三昧	—		『日並記』

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
317 三回忌	嘉永元年6月19・20日	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
318		孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	泉海長老、陽岳長老		『日並記』
319	嘉永5年6月19・20	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
320		孝明天皇	泉涌寺	○	—	—		『橋本実久日記』
321		孝明天皇	般舟院	—	—	—		『橋本実久日記』
322	安政5年6月19・20日	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧、理趣三昧	—		『日並記』
323		孝明天皇	般舟院	—	—	—		『野宮定功日記』
324	文久2年6月19・20日	孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	泉海長老、湛然長老		『日並記』

⑨新平門院 弘化4年10月13日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
325 一周忌	嘉永元年10月12・13日	孝明天皇	般舟院	○	勢陀三昧、法華懺法	廬山寺		『橋本実久日記』
326		孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	誓鯨長老、泉海長老		『日並記』
327		孝明天皇	禁裏御所(孝明) 清涼殿	○	懺法講	四王院僧正明道		『橋本実久日記』
328	三回忌	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『橋本実久日記』
329	嘉永2年10月12・13日	孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	誓鯨長老、西寅長老		『日並記』
330		孝明天皇	般舟院	○	—	—		『云奏三条実万日記』
331	四回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
332	五回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
333		孝明天皇	禁裏御所(孝明) 清涼殿	○	懺法講	四王院僧正明道		『橋本実久日記』
334	七回忌	孝明天皇	般舟院	○	不明、如法念仏懺法	不明、二尊院		『橋本実久日記』
335	嘉永6年10月12・13日	孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	明寅長老、誓鯨長老		『日並記』
336	九回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
337		孝明天皇	禁裏御所(孝明) 清涼殿	○	懺法講	天台座主梶井宮昌仁親王	梶井宮不参のため、實成院僧正長海・四王院僧正明道を導師を助める	『非藏人日記』
338	十三回忌	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『武家往来書翰』
339		孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華懺法	陽岳長老、陽道長老		『日並記』
340	十四回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
341	十五回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	—		『日並記』
342	十六回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	象海長老		『日並記』
343		孝明天皇	禁裏御所(孝明) 清涼殿	○	懺法講	天台座主梶井宮昌仁親王	梶井宮不参のため、實成院僧正長海が導師を助める	『野宮定功公武御用日記』
344	十七回忌	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『中山忠能日記』
345		孝明天皇	泉涌寺	○	—	—		『中山忠能日記』
346	十八回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧	湛然長老		『日並記』
347	十九回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	天滿御魂	尊玄長老		『日並記』
348	二十回忌	孝明天皇	泉涌寺	—	光明三昧、大施餉鬼	—		『日並記』

②新待賢門院 安政3年7月6日死去

形式(回忌)	年月日	主 催	執行場所	公卿 着座	内 容	導 師	備 考	典 拠
349 一週忌	安政 4年 7月 5・6 日	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『武家往来書翰』
350		孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華 懺法	尋玄長老、尋玄長老		『日並記』
351 三回忌	安政 5年 7月 5・6 日	孝明天皇	般舟院	○	—	—		『武家往来書翰』
352		孝明天皇	泉涌寺	○	—	—		『武家往来書翰』
353 四回忌	安政 6年 7月 5 日	孝明天皇	泉涌寺	—	—	—		『日並記』
354 五回忌	萬延元年 7月 6 日	孝明天皇	泉涌寺	—	法華懺法	象海長老		『日並記』
355		孝明天皇	般舟院	○	—	—		『野宮定功日記』
356 七回忌	文久 2年 7月 5・6 日	孝明天皇	泉涌寺	○	光明三昧、法華 懺法	尋玄長老、象海長老		『日並記』

典拠：『葉室類業記』『基量卿記』『日野輝光卿記』『永貞卿記』『日野西資敬日記』『日野資枝公武御用雜記』『御原光光日記』『橋本実麿日記』『野宮定晴日記』『野宮定祥日記』『野宮定功公武御用日記』『山科忠言卿記』『山科忠言卿伝奏記』(宮内庁書陵部所蔵、『道房公記』(宮内庁書陵部所蔵、東京大学史料編纂所所蔵、Hb-CAT Plus)を使用、『孝亮信祿記』『忠利信祿記』『季連信祿記』『泰重卿記』『庭田重冬日記』『柳原均光日記』(宮内庁書陵部所蔵、国文学研究資料館『新日本古典籍総合データベース』を使用、『頼宣卿記』(宮内庁書陵部所蔵写本、『般舟三昧院御用日次披露』(宮内庁書陵部所蔵写本、国文学研究資料館『新日本古典籍総合データベース』を使用、『陳道公記』『実備公記』(東京大学史料編纂所所蔵、『公武御用雜記』(東京大学史料編纂所所蔵写本、同「所蔵史料目録データベース」を使用、『伊光記』『无上法院殿御日記』(東京大学史料編纂所所蔵、同「所蔵史料目録データベース」を使用、『寛福公記』『寶助卿記』(後中内記)、『八槐卿記』『淳房卿記』『頼房卿記』『昭房卿記』『正房卿記』『博房卿記』(国立公文書館所蔵写本、同「デジタルアーカイブ」を使用、『南福公記』『基照公記』『経照公記』(京都府立京都学・歴彩館公開陽明文庫デジタル画像)、『日並記』(泉涌寺所蔵)、『百武録』(二条家番所日記)、『非蔵人日記』(武家書翰往来)、『史料稿本』(東京大学史料編纂所所蔵、同「近世編年データベース」を使用、『藤巻記』『寛方朝臣記抄』『寛徳朝臣記』『官公事抄』『禁中口次記』『禁裏番衆所日記』『禁裏執次詰所日記』『洞中執次詰所日記』『日次案』(院中評定日次案)、『院中番衆所日記』『御湯殿上日記』『仙洞女房日記』『女一宮女房日記』『日記案』(正親町天皇実録)、『後醍醐天皇実録』『後水尾天皇実録』『明正天皇実録』『後光明天皇実録』『後西天皇実録』『應元天皇実録』『東山天皇実録』『中御門天皇実録』『後醍醐天皇実録』『後深田天皇実録』『光格天皇実録』『仁孝天皇実録』『孝明天皇実録』『ゆまに書房、2005～2006年)、『伝奏三条実万日記』(『孝明天皇紀』吉川弘文館、1967年)、『公卿補任』(新訂増補版、吉川弘文館、1974～1976年)、『緯史愚抄』(新訂増補版、吉川弘文館、1966年)、『おゆどのうへの日記』(総群書類従)、『言経卿記』(岩波書店、1959～1991年)、『中山忠能日記』(東京大学出版会、1973年)、『樂部法親王日記』(吉川弘文館、1976～1978年)、『楠寛記』(復刻版、思文閣出版、1997年)、『通兄公記』(総群書類従完成会・八木書店、1991年～2008年)、『泰重卿記』(総群書類従完成会、1993～2004年)、『時慶記』(随川書店、2002年～2019年)。

表5 年忌法要執行寺院の変遷・割合

17 世紀前半
(1601～1650)

	般舟院	泉涌寺	宮 中	その他	
天 皇	33	14	24	0	71
女 院	5	0	4	0	9
小 計	38	14	28	0	80
	47.50%	17.50%	35.00%	0.00%	100%

17 世紀後半
(1651～1700)

	般舟院	泉涌寺	宮 中	その他	
天 皇	34	25	20	1	80
女 院	21	27	7	1	56
小 計	55	52	27	2	136
	40.44%	38.24%	19.85%	1.47%	100.00%

18 世紀前半
(1701～1750)

	般舟院	泉涌寺	宮 中	その他	
天 皇	89	48	9	0	146
女 院	57	28	7	7	99
小 計	146	76	16	7	245
	59.59%	31.02%	6.53%	2.86%	100.00%

18 世紀後半
(1751～1800)

	般舟院	泉涌寺	宮 中	その他	
天 皇	129	54	17	0	200
女 院	42	23	5	1	71
小 計	171	77	22	1	271
	63.10%	28.41%	8.12%	0.37%	100.00%

19 世紀以降
(1801～1867)

	般舟院	泉涌寺	宮 中	その他	
天 皇	84	87	13	1	185
女 院	58	54	6	3	121
小 計	142	141	19	4	306
	46.41%	46.08%	6.21%	1.31%	100.00%

合 計	552	360	112	14	1038
	53.18%	34.68%	10.79%	1.35%	100.00%